
I・000・S インフィニット・オーズ・ストラトス

コントローラー・X

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I・000・S インフィニット・オーズ・ストラトス

【Zコード】

Z6059X

【作者名】

コントローラー・X

【あらすじ】

女性にしか使えない世界最強の兵器、IS インフィニット・ストラトス。

しかし、世界で唯一ISを使える男がいた。

今、この世界に《誕生》した《欲望のIS》と男の物語が始まる。

プロローグ（前書き）

初投稿なので文章が目茶苦茶だと思いますが、暖かい眼差しで読んでくれると嬉しいです。

プロローグ

夜、とある高層ビルの会長室。そこには2人の青年と、椅子に座っている1人の男性がいた。

「明日がIIS学園へ転校だつたな、竜馬君」

椅子に座っている白髪混じりの男性の名は、黒木 白黒。日本に数多くのIIS開発企業の会長である。

「はい、白黒さん…」

そして、返事をした黒髪の青年……龍東 竜馬は元気に答えた。

「いや～もうすぐ俺の開発したIISが日の出るなんて、こっちも緊張してきたなあ……」

白衣を羽織った青年……黒木 影宮はそう言いながら右手を胸に当てながら緊張していた。

「息子よ。竜馬君のIISは…」

「これだよ」

そう言いながら影宮は、ポケットから直径3cm、厚さ6mmの銀色のメダルを取り出した。表に十字の模様、裏は三つ円が横に並んだ模様が描かれているメダルだった。

「待機状態になつてゐるが、呼び出せばすぐに展開できるからな」

影宮はメダルを竜馬に渡すと、竜馬はメダルにある小さな穴に赤い

リボンを通して首に掛けた。

「…？ そのリボンは…」

「あ、小2の転校する時に友達から貰ったんです。『いつまでも、私たちは友達だ！』って……」

竜馬は田を開けて思い出していった。転校する事が決まりこの学校での最後の授業、パーティーをした女の子に友達の証として貰ったリボンの事を……。

「影宮さん、白黒さん、今までお世話になりました」

そして田を開けて、影宮と白黒に感謝の言葉を述べた。8歳に両親を亡くし自分を引き取ってくれた白黒と、実の兄のように相談に乗ってくれた影宮だ。

「ハツハツハツ！ 竜馬君、長期休暇に入つたらまた戻つて来なさい。ここはもう、君の家なんだからな」

白黒は笑顔で言うと、竜馬は「はー！」と嬉しそうに言った。

「アレが完成したら届けるから、それまではセルで頑張ってくれ。期待してるぞ」

影宮は竜馬の肩に手を置きながら言った。

「はい。これからもドロイドや武器の開発、頑張って下さー

「ああ、そつちも《オーバーズ》を頼むぞ」

「はい！」

二人は固い握手を交わし、会長室を出てそれぞれの部屋に戻つてい
つた。

主人公設定（11／04訂正）（前書き）

主人公のプロフィールと設定です。

主人公設定（11／04訂正）

名前：龍東 竜馬 りゅうとうりゅうま

年齢：15歳

性別：男

所属：1年1組

好き：大切な人や友達の笑顔、麺料理（パスタもOK）

嫌い：大切な人や友達を傷つかせる存在、ゴーヤ

趣味：プラモデル、旅行

マイペースな性格だが、誰でも優しく接する事が出来る。
成績は中の上だが、なかなかの切れ者らしい。

身体能力は高く、天性の格闘センスを發揮させる。

千冬とは小さい頃よく遊んでもらっていた。

8歳の頃に両親を事故で亡くし、知り合いの「IS開発会社」「メルダ・ファウンデーション」会長、黒木 白黒くろきはくろに引き取られる。

引き取られると同時に、今いた小学校を転校してしまった。

篠とは同じクラスの友達だったが、転校当日に篠はリボンを『友達の証』として竜馬に渡した。

転校した学校では鈴、弾、蘭と出会い、親友になった。

中学校には通わず通信教育をしていた。そのため、白黒の仕事の邪魔にならないようつっこ着いて行き、世界中回った。

世界中を回った時に、鈴と千冬に再会している。

13歳の時オーストラリアで束と出会い、「君にはEHSを使える才能があるね やつたじやん、ブイブイ！」等と言われた。

ある事件の後、会社にあるEHSを起動することができ世間に発表された。

0-1話【黙ヒクラスマーテルヒの夢】（前編）

やっと1話の完成……のはずが、本文がめちゃくちゃな部分がありたので修正しました。

01話【男とクラスマートとHS学園】

メルダ・ファウンデーション 駐車場

「竜馬、準備ができたぞ」

「ありがとうございます、影宮さん」

影宮は、愛用の黒ベンツに竜馬を乗せていた。

「ゲート前でいいんだな」

「はい。そこから担任の方が案内に来てくれるから大丈夫ですよ」

「そうか。じゃあ、出発だ！」

そして、一人を乗せたベンツは駐車場から出発した。

HS学園 ゲート前

「……まだかなあ」

影宮にゲート前まで送つてもらい別れて10分、竜馬は担任の到着を待つていた。

(HS学園の職員つて、全員が女性だったな。担任も美人なのかなあ……)

そう思つていると、こちらに近付く女性に気がついた。黒のスースにタイトスカート、すらりとした長身、よく鍛えられているが決して過肉厚ではないボディライン。

「あつー！」

竜馬はその女性を知つていた。白黒の仕事でドイツへ行つた時に面識があつたのだ。

「すまない、遅くなつてしまつたな」

「千冬さんーお久しぶりですっーー！」

竜馬は女性…織斑 千冬に笑みを浮かべてお辞儀をした。

「ああ、ドイツで会つた以来だな竜馬。黒木会長は元気か？」

「はい。田黒さんも影宮さんも、相変わらず元気ですよ」

「ふつ、やうか」

千冬は軽く微笑むと、二人は歩き始めた。

「束に聞いたが、まさかお前がEHSを使えるとはなあ……」

「僕も最初は驚きました。2年前に束さんと会つて、『君にはEHSを使える才能があるね よかつたじゅん、ブイブイー』って、急に言いましたからねえ……」

竜馬は束との思ひ出をしみじみとするべ、千冬は小さく溜め息を吐いた。

「全く、束は相変わらずか。……その様子から見ると、基礎知識と訓練は十分そうだな」

千冬は改めて竜馬を見た。3年前の竜馬の体つきとは違い、がたいが良くなっていた。

「束さんの言葉から今に至るまでは、EHSの勉強を中心にしていましたからね。それにこれも」「

そつと、竜馬は首に掛けてあるメダルを千冬に見せた。

「これが、お前の……」

千冬は何か言おうとしたが、教室の前まで来てしまった。

「まあ、後で話す。今はここで待機しろよ」

「はい、ちふ……じゃなかつた。織斑先生」

竜馬は千冬を織斑先生と訂正して言つと、千冬は小さく微笑みをした。その後、千冬が教室に入りS H R Rが始まった。

(数分後)

1年1組

「それではＳＨＲを終了する…………と言いたいところだが、ここでも
まだ自己紹介をしていない奴がいる」

そう言い終わると、クラス全員がざわめいた。

(入学式早々に転校生? いつたい誰だ?)

その一人、ポニー・テールが特徴の女子……篠ノ之 篠は考えていた。

「入れ」

「はい、失礼します」

千冬は廊下で待たせている竜馬を呼ぶと、扉が開いた。
竜馬が入ると、まずクラス全員が固まった。

(え……? あい……つは……)

そして、筍は田を見開いていた。

「自己紹介をしてくれ」

「はい。えっと…、龍東 竜馬です。よろしくお願ひします」

竜馬はそつ言いつと微笑んで、軽く頭を下げる。

「…………」

「…………？」

だがクラスの反応が無く、竜馬は頭にハテナマークを浮かべたような顔をした。
だが次の瞬間……

「………… も」「」

「 もへ。」

「………… キヤアアアアアア…………」「」

「ほわっ…」

突然の黄色い叫びに竜馬は後ずさりし、所々声が聞こえた。

「やつたわー男子よ男子ー！」

「しかもウチのクラスー！」

「…………」「ち向いてー！」

「凄くイケメンねー嫌いじゃないわっー！」

「あ、あははは……」

こんな場面に遭遇した竜馬も、流石に苦笑いするしかなかった。

「つるさいで馬鹿者共！……まったく。毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ……」

クラスを静めさせると、千冬は溜め息を吐いた。

「龍東、お前の席は篠ノ之の後ろだ」

千冬は窓際の席を見ながら言つて、竜馬は席に近づいた。そして筈と田が合ひつと、微笑んで言つた。

「8歳の時以来かな。久しぶり、筈」

「あ、ああ……。久しぶりだな、竜馬……」

一人は握手をしようとした瞬間……

バシツ！

「あ痛つ！」

「喜びの再会は後にしろ」

竜馬の頭に出席簿が叩き付けられ、握手が出来なかつた。

休み時間 屋上

1時間田の授業が終わり、龍馬と篠は屋上に来ていた。教室ではクラス全員だけではなく、2・3年の先輩も詰めかけていたため篠と話が出来ないので、篠を連れて屋上へと移ってきた。

「8年ぶりかな、最後に会ったのって……」

「あ、ああ……そうだな……」

「それにしても……」

「な、何だ」

龍馬は話しかけたが、篠は顔を赤らめて頷いた。

竜馬は篠を見つめると、篠は更に顔を赤らめた。

「うん、やつぱつ篠にはボーネールが似合つてゐるね。可愛いくて

「か、かわつ、可愛い…、體を重つなつ……」

「はまつ。嘘じやなこよ

「む、むわ……」

竜馬は微笑みながら言つと、筈は顔を真っ赤にして俯いた。

「あ。あとこれ……」

竜馬は首に掛けてるリボンを筈に見せると、筈は懐かしむように見ていた。

「懐かしいな。まだ持つてたのか……」

「ああ。友達の証を無くすなんて、出来ないよ」

「ふふつ、全くだ。無くしてたのなら、私の竹刀が黙つてないからな」

「おお怖い……」

一人はふざけながらも、久しづびりの再会を喜んでいた。

キーンコーンカーンコーン

「あ、もう時間か」

「そりだな」

授業開始のチャイムが鳴り響き一人は屋上の扉まで行くと、扉の前で竜馬は止まり、笑顔で筈に利き腕の拳を突き出した。

「いれからもよひしへ、 篠」

「あつー。」

篠も笑顔になり、竜馬の拳を自分の拳に突き出した。
これが、竜馬の親友の証である。

2時間目 教室

篠 Side

私は小学生の頃、道場に通うクラスの男子がいた。そいつの名前は

龍東 竜馬。

同年代と試合して負けなしの私が唯一、勝てなかつた奴だ。

最初は、「次は勝つ!」と、私が田標にする『気持ちぐら』しか思わなかつた。

でもある日、私が男子達に【男女】と言われて虚められた時に、竜馬が男子達に向かつて言つてくれた。

「なに男が女の子を虚めてるんだよー・そんな最低な事して、恥ずかしくないのかよー。」

それからだ。私が竜馬を田標としての気持ち以外に、あいつを意識

し始めた。

竜馬は強いだけじゃなく、老若男女誰にでも優しく、あいつの笑顔はみんなを優しい気持ちにしてくれること。

そして……誰よりも……かつこじいのだと……。

だけどあの日、道場で竜馬と稽古をしていた時に雪子叔母さんが息を乱して入つてくると、涙を浮かべて竜馬に言つていた。

「竜馬くんの……」両親が、交通事故で……っ……！」

私は目を見開いた。嘘だ！あの優しい童子さんと人柄の良い竜治さんが亡くなつたなんて。

その話を聞き終わる頃、竜馬は意識を失つてしまつた。

数日後、竜馬のご両親の葬式が終わった頃に白黒さんが尋ねてきた。白黒さんの息子、影富さんは姉さんの研究者仲間でたまに顔を合わせた程度だ。

尋ねてきた理由は、竜馬を引き取りに来て、今の学校を転校してしまふと言つていた。

それを聞いた夜、私は布団のなかで泣いた。

竜馬が引越す日、私はある決心をしていた。あいつに告白すると、決心していた。

だが、いざ言おうとした時…

「い、いつまでも、私たちは友達だ…！」

私は臆病だ……あれだけ決心したのに、竜馬を前にしただけで心臓が壊れそうだった。

「……。ありがとう」

だが、それを聞いた竜馬は目に涙を溜めながら、私の好きな笑顔をしてくれ、親友の証をしてくれた。

それを終えると、私は髪を結んでいたリボンを竜馬に渡し、そして別れた。

あれから8年、私は竜馬を忘れる事はなかった。

だが2年前、ISを使える男が現れたとニュースを見て驚いた。

竜馬だった。成長はしているが、あの笑顔を私は忘れなかった。

IS学園に入学し、姉さんの友達の千冬さんが担任で驚いたがさらに竜馬が転校てきて、更に驚いた。

休み時間にいろいろ話をしようとしたが、短すぎてあまり話せなかつた。でも、親友の証をして私は思つた。

私は今でも……竜馬が好きだ！

休み時間 教室

「へえー、りゅーくんってあのメルダに居候してたんだー」

「メルダって、あのメルダ・ファウンデーションでしょ？」

「やつぱりエスを使える男子ってスゴイなあー」

2時間目が終了すると、竜馬はクラスの女子に質問攻めにされたいた。上から、布仏 本音、相川 清香、谷本 癒子が喋つており、本音の言つ《りゅーくん》とは竜馬の事である。

「そうだなあ、あとは「ちょっと、よろしくて?」……ん?」

会話中、後ろから声をかけられた竜馬は振り向いた。話しかけてきた相手は、わずかにロールがかかった金髪のロングヘアの女子だった。

「まあ!なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがいるんではないかしら?」

「えつと……(何なんだこの人。いきなり突っ掛かってきて……ん?)この人は……」

突つ掛かってきた女子に竜馬は戸惑うが、ベンツ車内で読んでいた1組の生徒リストで同じ顔だったのを思い出した。

「たしか……、セシリア・オルコットさんだよね？イギリス代表候補生で、入学試験で教官を倒した……」

「あら、ご存知でしたのね？」

「まあ、クラスメートの名前くらいは覚えないと失礼だしね。まさか代表候補生と同じクラスになるとは、僕も最初は驚いたよ」

竜馬は右頬を搔きながら言つと、セシリアは人差し指をびしっと竜馬に向けた。

「そう！本来ならわたくしのよつな選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。それは分かつてますわよね？」

「まあ篳にも久しぶりに会えたし、たしかにラッキーかも……」

「そつ言つと、セシリアの田がややつり上がり竜馬に迫つていった。

「わたくしよりも友人と会えた方が幸運つて、どういう意味かしら！」

「え、えつと……まあ落ち着いて」

「！」これが落ち着いていられ

キーングーランカーンゴーン

セシリ亞の話に3時間目開始のチャイムが割つて入った。

「つ……一またあとで来ますわー逃げないことねーよくつてー」

セシリ亞は一方的に言つと、竜馬に背を向けて自分の席に戻つた。

一方、筈は……

(りり、竜馬が、わわわ私と会えて……らりらりら、ラッキーつて~
~~~~)

……俯いて悶えていた。

3時間目 教室

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

3時間目、教壇には千冬が立つていた。尚、1・2時間目の授業を教えていたのは副担任の山田 真耶である。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決め

ないといけないな

思い出したよつに千冬が言ひ、クラスがざわざわと色々立つてい  
た。しかし、竜馬は冷静にしていた。

(代表者か……。対抗戦とか出れるから、データを取るには良い役  
所かな)

そつ考えていると、女子の一人が手を挙げて言つた。

「はい。龍東くんを推薦します!」

「私もそれが良いと思いますー」

「では候補者は龍東 竜馬…………他にはいないか?自薦他薦は問わ  
ないぞ」

話が進むと、筈は竜馬に言つた。

「いいのか?竜馬

「何が?」

「これではお前が代表者になるが……」

「んー……まあ良いけどね。男が乗る車なんて、いろいろと経験  
を積めそうだし。なにより……」

「なにより?」

「面白そうだ」

「カツ！」と笑みをした竜馬を見て、筈は微笑んで「まつたく…変わつてないな」と言つた瞬間、教室の後ろにバンッ！と音がした。

「待つてください！納得がいきませんわ！」

音の正体は、机を叩いて立ち上がったセシリアだった。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに……このセシリア・オルコットにそのような屈辱を1年間味わえとおっしゃるのですか！？」

セシリアは怒涛の剣幕で言葉を荒げると、癪にさわったのか筈が言った。

「ひなせこども。少しば落ち着いたりどうだ」

「貴女はお黙りなさい！」エドワードの貴女に、Aのわたくし意見だなんて図々しいですわ！」

「なつ…！何だと」

セシリアの言葉に、筈は怒りの表情で立ち上がりとした瞬間、それは起こった。

「いい加減にしないか！！」

「「つ..」」

大声に驚いた筈とセシリアは、声がした方に目を向けた。そこには、

セシリ亞を少し睨むのみで見ている竜馬だった。

「黙つて聞いていれば……。僕を馬鹿にしたり、侮辱するなり良いよ。だけど、親友を侮辱だけはするな！」

「竜馬……」

竜馬は竜馬を見て驚きと嬉しさを感じていた。まるで、昔に馳められたところを助けてくれたようだ。

「な、なにかと思えば……。大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で

「イギリスだって大してお国自慢がないくせに。あるのは世界一まずい料理の連續覇者ぐらいだろ」「なつ…………！」？

竜馬が言つた一言で、怒髪天をつくと言わんばかりのセシリ亞が顔を真つ赤にして怒りを示していた。

「あつ、あつ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますのー！？」

「先に侮辱したのは君だろー！？」

睨み合いのなか、セシリ亞はバンッ！と机を叩いて人差し指を竜馬に指した。

「決闘ですか！」

「ああ、いいよ

「言つておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い……こえ、奴隸にしますわよ」

「真剣勝負に男も女も関係ないよ。手を抜くほど腐つてないよ」

「やう? 何にせよひょうじいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね!」

セシリアが言い終わると、竜馬はある事を言った。

「んじゃ、ハンデはどのくらいつけたらいいかな?」

「…………はい?」

竜馬が言つた一言にセシリアはア然としたが、その瞬間にクラスからドッとも爆笑が巻き起こつた。

「り、竜馬くん、それ本気で言つてるの?」

「女尊男卑の今、男が女より強かつたのって大昔の話だよ?」

クラスの女子は話しかけるが竜馬は動じなかつた。

「ふふつ、日本の男子はジョークセンスがありますのね。むしろ、専用機を持つわたくしがハンデを付けなくていいのか迷うくらいですわ」

そう言つと、セシリアは左耳に付けてあるイヤーカフスを竜馬に見せた。どうやら、あれがセシリアのHSのよつだ。

「ハツハツハツハツ！」

だが、竜馬は気にせず笑っていた。

「……やつぱり、ハンデ付けた方がいいかな?」

「はあ!?.だからそれは、専用機を持つわたくしが専用機を持つてたらハンデを付けていいんでしょう?」  
「だから、え?」

竜馬の言葉に、セシリ亞や幕を含むクラス全員が静まり返った。それをよそに、竜馬は首に掛けたリボンを取り外し、メダルをセシリ亞に見せた。

「ま、まさかそれは……」

「ああ。僕の専用機だよ」

「ええええええ……」「

クラス全員が驚き叫ぶと、コソコソと何か音が聞こえていた。

「あれ?何でしちゃうか…」

真耶は音のする方に目をやると固まつた。窓を見ると、黒い小さな鳥型ロボットが32インチ薄型テレビを持つて窓を突いていた。

『何やら面白そうな事が始まるみたいだな』

画面に映し出されたのは、影宮だった。

「影宮わざ。エ!」  
「それを……」

『細かい事は気にするなーそれより、専用機と闘えるなんていいいじゃないか。頑張れよー!』

「はい、頑張りますー！」

影富は親指を立てて健闘を祈ると、竜馬も親指を立てた。そして、鳥口ボットはテレビを持ちながら空に飛んでいった。

「さて、話はまとまつたな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第3アリーナで行う。龍東とオルゴットはそれぞれ用意をしておへよ!」

ぱんつと手を打った千冬は話しを締めて、授業を再開した。

## 02話【回棱と代表決定戦と誕生のオーバース】（前書き）

2話ができました。

やつといらがでたよ……。 戦闘シーンが難しいです……。

## 02話【同棲と代表決定戦と誕生のオーバース】

放課後 学園内

授業が終わり、竜馬は一人で学園内を探索していた。

「それにしても、ものすごい視線だな……」

中庭を歩いているだけで、竜馬は女子の目線を集めていた。元々 I S 学園は女しかいなかつたので無理もない。

「今日で全部回るのは無理だな……。ん？」

竜馬は立ち止まると、黒い自販機を見つけて近づいていった。

( )にもベンダーがあるんだ。形状から見ると販売専用型か……。  
よしー)

そう思ふと、竜馬は意識を手に集中するとメダルが5枚現れた。首に掛けてあるメダルと同じ形だが、裏の模様は5枚全て違っていた。共通するなら、全て生き物が描かれていた。  
これが I S 専用メダル…セルメダルである。

「…………」

竜馬は I S のメダルを自販機にかざすと、硬貨投入口とは別の投入口が中央に現れた。同時に飲み物が全て、赤、緑、水色、黄と、色とりどりの缶に変わった。

「！」の場合は、タ力にするかな……」

言いながら全てのセルメダルを投入し、赤い缶を5本買った。

「そんじゃまあ……」

竜馬は、プシュッ！と缶を一本開けた。すると……

【TAKA KAN】

『キューイー！』

『キューイー！』『キューイー！』

赤い缶は鳥型ロボットに変型し、残りの缶も同時に変型した。

これが、メルダ・ファウンティーション製作の可変型缶ロボット《カンドロイド》と、カンドロイド販売機である。

「学園の施設・設備の場所を調べてくれ。あと、学園にあと何台ベンダーがあるのかも頼むね」

『キューイー！』

そう言われたタカ・カンドロイド達は手分けして飛び立ち、竜馬は見届けたあと再び歩き始めた。

廊下 職員室前

日も暮れる頃、竜馬はタカ・カンドロイド達が集めた施設の場所をメモに記入しながら歩いていると、前から真耶が歩いて来た。

「あつ、龍東くん。何しているんですか？」

「さつき学園の施設等を調べてました。ここは広いから、迷わないよつこ一様……」

竜馬は書きかけのメモを見せると、真耶は頷いた。

「やつですか。実は寮の部屋の事ですが……個室の方が用意出来てなくて、1ヶ月程相部屋になつてもらいますね」

そう言つた真耶は部屋番号の書かれた紙と鍵を渡した。

「届いた荷物は部屋にありますから、時間を見て部屋に行つてください。それじゃあ私は会議があるので、これで」

「はい。さよなら、山田先生。また明日」

竜馬は頭を下げると、寮に向かつて歩きだした。

寮

「1025室……！」か

竜馬は紙に書かれた番号と見比べると、数回ノックした。

「…………いなかな？」

返事が無かつたのでドアに鍵を差し込むが、ドアは開いていた。

ガチャ

「失礼しまー……おおー！」

竜馬は部屋に入る驚いた。大きめのベッドが一つ並び、そこいらのビジネスホテルよりも遙かにいい部屋だった。

「荷物は……」れだな

竜馬は机の下に置いてあつた荷物を開け、中にあるものをチェック

した。

「えっと……着替えに携帯充電器、iP ad、セルメダルケース  
……ん？」

すると、箱の底にはオレンジ色の缶と黒の缶があった。

「新型カンドロイドか……。後で開けてみる「誰かいののか?」  
つー!」

竜馬は突然、奥の方から声が聞こえて驚いていると扉が開いた。

「ああ、同室になつた者が。これから一年、よろしく頼むぞ」

出てきたのは、体をバスタオル1枚を巻いてタオルで長い髪を拭いていた、今日再会を果たした親友だつた。

「こんな格好ですまないな。シャワーを使っていた。私は篠ノ「ほ  
つ、第！？」之……えつ？」

自己紹介をしようとした筈は、聞き覚えのある声を聞いてきょとんとした。

「ニ、ニヤ、ハ、ア、リ、テ、」

「あつ、ああ……」

2人は顔を真っ赤になつた次の瞬間……

「ドゴオォン！」

「あべしつー！」

真っ赤な顔をした筈の強烈なアッパー・カットが、竜馬の額にクリーンヒットし、そして……

バタリ

「うつ、竜馬！？」しつかりしつかり、竜馬ー！」

そのまま竜馬は気絶をしてしまって、筈は慌ててしまった。

（十数分後）

「（うめん…本ひ當に）うめん！」

「いや、私の方こそすまない。もう頭をあげてくれ

田を覚ました竜馬は理由を筈に話し、ひたすら謝罪をしていた。尚、筈は竜馬の氣絶中に寝間着浴衣に着替えていた。

「と、とつあえず、同室になるのだから色々と決めておかなければならぬ……」「……」

「そ、そうだね……」

一人は顔を合わせるが、頬が赤かつた。あの場面を思い出すので無理もない。

「ま、まかシャワー室の使用時間だが……」

「ああ、篝が先でいいよ。剣道部に入ってるし、終わつたあとそつぱりしたいしね」

「や、そつか……」

「…………」

「な、何見ていろ……」

「ん？ やつぱり篝つて、浴衣とか似合つてるなーと思つてね」

「にあつ…………！」

不意に言つた竜馬の言葉に、篝は顔を真つ赤にして立ち上がつた。

「篝？ デリ……」「あ、ああそつだーそこのジユースを貰つがー……え？」

竜馬の言葉を遮った簞は、竜馬の机に置いてあつたオレンジ色の缶を手に取つた。

「ああ、それは…」

「ん…？」

止めようとした竜馬だが、簞は缶のフルタブを開けてしまった。すると……

## 【KUJAKU KAN】

『クジャク』

「やめ…」

突然の出来事に、簞は後ろに下がつた。目の前にいるのは、後ろでカッターを回転させて飛んでいるカンドロイド……クジャク・カンドロイドである。

「簞、大丈夫か？」

「あ、ああ……何なんだコレは？」

「ソレは影宮さんの発明品だよ。使用者のサポートをする為に開発したみたい」

## 【GORILLA KAN】

『ウホッ！ウホッ！ウホッ！』

そう言いながら、竜馬は黒い缶……ゴリラ・カンドロイドを起動させた。

「そうか。……なあ、竜馬。来週の試合だが……」「箒、頼みがあるんだ」「な、なんだ?」

話の途中、竜馬は真剣な顔で箒を見ながら告げた。

「付き合つてほしい」

「え?」

この時、箒は世界が止まる音を聞いた。

（翌日）

「いのん、遅くなつた……よ~。」

「…………」

授業を終えた2人は、胴着姿で道場にいた。尚、竜馬の胴着は影宮に届けて貰つた。

「どうしたの、筈?」

「……何でもない」

「?」

筈は頬を膨らませて不機嫌だが、竜馬は首を傾げるしかなかつた。

(何が「付き合つてほし」「だ!特訓の相手ではないか!私はてつきり、その……)

筈は不機嫌の理由を心の声で叫んでいたが、後になるにつれて心の声は小さくなつていた。

「…………筈……」

「はつ……」

筈は我に返ると、竜馬は心配そうに見ていた。

「体調が悪いの?やつぱつ、止めた方が……」

「だだだ、大丈夫だ……ほら、さつさと防具を着けろ……」

「あ、ああ……」

竇の態度を気にしたが、竜馬は自分の黒い防具を着けた。竇も赤い防具を着け、2人は向き合った。

「竇と打ち合つのは、本当に久しぶりだな」

竜馬は親友と一緒に、剣道をした頃を懐かしく思い目を閉じ……。

「そうだな。私はもう、昔の私とは違つた」

竇は片思いの人と、また打ち合つ事が出来て小さく微笑んだ。

「それじゃ……」

竜馬は目を開いたが、いつもと違い、真剣な眼差しをしていた。そして……

「お願いするよ、全国大会優勝者さん！」

「よし、じこー！」

特訓が開始された。

「…………」

同時刻、セシリアは教室の窓から空を見上げていた。

（あの男も専用機を持つているなんて……）

男……竜馬の発言した専用機の所持を聞いて、セシリアは考えていた。

「…………（フルフル）」

だがセシリアはその考えを消して、自分の勝利した事を考えだした。

（まあ……例え専用機でも、わたしの勝利は見えますわ。このわたくし、セシリア・オルコットと『ブルー・ティアーズ』が……）

そう思いながら、セシリアは左耳のイヤーカフスを優しく撫でた。

「ねえねえ、道場で篠ノ之さんと竜馬君が剣道で打ち合つてゐた  
いよー！」

すると、廊下から話し声が聞こえてきた。

「ホントー篠ノ之さんって、去年の剣道全国大会で優勝したんでし  
ょ。竜馬君、勝ち田ないんじやないの？」

「そりゃそりだけど、面白くないじやない。はやく行きましょー！」

話していた女子達は道場へと向かった。

(篠ノえさんがねえ……。面白やうですわね。あの男がボロボロで泣いているのが目に浮かびますわ)

その話を聞いたセシリアは意地悪な笑みをして、教室を出でいった。  
竜馬と筈が特訓している道場へと……。

## 道場

セシリアは道場に来ると中を見た。すると、剣道は終盤に差し掛かっていた。

「はああああっ！」

筈は竹刀を上段に構えて走り込み、竜馬に迫る。だが竜馬は一步も動かずにいた。そして…

「バシイイイン！」

竹刀の音が、勢いよく響いた。

「なつ……」

セシリ亞は一瞬の出来事に驚いた。

筈が竜馬の面を打ち圧しつとした瞬間、竜馬が急に筈の懷に飛び込み胴を打ち込んだ。

「　　おおおー！」

ギャラリーは2人に拍手を送ると、2人は面を外した。互いの顔にはうつすらと汗をかいていた。

「ふう……。コレで8勝2敗。腕を上げたね、筈」

「むう……。これでは竜馬の特訓と言つより、私の特訓ではないか」

「そうかな？僕も最初取られた時は焦つたけど……」

「だが、そこから5連勝したではないか……」

そう言つと、筈はシュンツと小さく落ち込んだ。

「まあまあ、落ち込まないの……ん？」

ふと、竜馬はギャラリーの中にいたセシリ亞を見つけると、声を掛けた。

「オルゴットさん。来週、良い試合をしよう」

「…………ふんっ」

竜馬は微笑みながら言つたが、セシリアはそっぽを向いて道場を後にした。

「…まだ怒つてゐるのか 「竜馬、何を見ていーるー」 エ?」

筈は不機嫌そうな顔をして竜馬を呼んだ。

「どうしたの筈?」

「休憩は終わりだ。続きをするだ

「分かった。そうしようか」

そして、試合が再会された。

その約1時間後、訓練は終了した。ちなみに、竜馬の結果は総合で  
24勝6敗だった。

夕方 食堂

「「いただきます」」

訓練後、竜馬と筈は一度部屋に戻つて用事を済ませ、食堂へ行つて夕食を取つていた。ちなみに、筈は焼き魚定食を取つており、竜馬  
は……

「まさかHIS学園でコレが食べれるなんて……」

竜馬の前にあるのは、うどんの上にライス、さらにカレーが掛けられておりトンカツがトッピングされていた。コレが、巷で人気急上昇の定食……カツカレーうどん定食である。

「美味しいなあ。特に衣の湿つた感が凄く好みだ……」

「よく食べれるな、その量を……」

「いっぴい動いたからね。よく食べれるよ」

竜馬は笑みを浮かべたが、箸を置いて箸を見た。

「箒、また時間があつたら剣道に付き合つてくれるかい?」

「ああ、いいぞ」

「ありがと。頼りにしてるよ」

竜馬は微笑みながら箒に話した。

「ああ……。（竜馬が頼ってくれている竜馬が頼ってくれている竜馬が頼ってくれている……）」

平然と答えたが、頭の中では幸福に満ちていた。

（翌週 月曜）

放課後 第3アリーナ・アピット

代表決定戦当日、竜馬はTシャツを着てアピットで待機していた。

「もうすぐか……」

「龍東、準備はいいか？」

竜馬は後ろを振り返ると、そこには千冬、真耶、篠がいた。

「織斑先生、どうして此処に？」

竜馬は質問すると、真耶が答えた。

「龍東くんのHSのデータがまだありませんので、実物を見させてもらっていますね」

「なんですか。篠は何で来たの？」

「わ、私は竜馬に激励をだな……」

篠は顔を赤くしながら言った。

「そつか。ありがと」

「龍東、HSを展開しろ」

「はい。（……行くよ、オーバーズ）」

千冬の言葉に、竜馬は目を閉じて心中で相棒を呼んだ。すると、メダルが輝いて竜馬を包み込んだ。光が消えるとそこには、両肩と背中に浮かんでいる甲冑のようなスラスターと、ベルトの正面と上に何かを入れる溝がある黒いHSを装着した竜馬がいた。

「コレが龍東くんの…」「《オーバーズ》…え？」

ふと、真耶は後ろを振り向いた。そこにいたのは、白衣を羽織った男だった。

「……影宮」

「あの時ぶりだな千冬さん。いや、ここでは先生かな？」

「どうして此処にきた」

「俺が開発したHSのお披露目だしさ、映像よりも生で見たいんだよねー。はいコレ」

そう言いながら、影宮は真耶にオーバーズの資料を渡した。

「竜馬、頑張って勝てよ」

「はい。」

影宮の言葉に答へ、竜馬はピット・ゲートに進もうとするが、幕にて話し掛けた。

「幕」

「な、なんだ?..」

「行つてくる」

「あ……ああ。勝つてこい」

竜馬はその言葉に笑顔で応え、ゲートを出た。

アリーナ・ステージ

「あら、逃げずに来ましたのね」

ステージには、セシリ亞が腰に手を当てて待っていた。

彼女は専用機・ブルー・ティアーズに身を包み、手には2mを超す長大なレーザーライフル『スター・ライトmk?』が握られていた。

試合は既に始まっているので、いつ撃つてもおかしくない状態だった。

「最後のチャンスをあげますわ

すると、セシリアは腰に当たる手を竜馬の方に、びつと人差し指を突き出した状態で向けた。

「チャンス？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなれば、今ここで謝るというのなら、許してあげないこともなくってよ」

そう言つたセシリアは田を笑みに細めた。すると、オーバーズの情報から、セシリアが射撃モードに移行し、セーフティのロック解除を確認した。

「……親友と約束したんだ。この勝負、負けるわけにはいかないよ

竜馬が言い終わると、右手に展開されたエネルギー刀<sup>(ラズライト)</sup>を構えた。

「そう? 残念ですか。それなら……お別れですわね!」

キュインッ!

言い終わる直後、セシリアはスタートライト<sup>(マーク)</sup>を竜馬を撃ち抜こうとした。

「よつと」

だが竜馬は弾丸を回避すると、スラスターの出力を上げてセシリシアに近づいた。

「甘いですわー。」

やつぱりと、ブルー・ティアーズのフイン・アーマーから自立起動兵器《ブルー・ティアーズ（別名『ジット』）》を開いた。

「ひちー。」

竜馬は近づくのを止め、ビットの回避に集中した。

「ああ、踊りなさい。わたくし、セシリ亞・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲でー！」

そして、ライフルビットによる射撃の嵐が、竜馬に襲い掛かる。

「だつたら…！」

竜馬はラズライトでゲームを弾きながら、左手にマシンガン《カービンM55》を開いた。そして、一つのビットに弾丸を放った。

「本体よりも先に叩くー。」

だがビットはカービンM55を回避し、落ち落とせなかつた。

「そこだー。」

「なつー。」

だが、龍馬はビジットの回避予測軌道にラズライトを投擲し一つ破壊するとい、セシリアは驚いた。

「なかなかやりますわねー。」

「ハツヤゼウス……。ヒー。」

セシリアは更に残りのビジットを全て展開すると、龍馬は回避に専念した。

アリーナ・アピッチ

「はああ……。すいこですねえ、龍東くん」

Aピッチでは、リアルタイムモニターを見ていた真耶がため息混じりにつぶやいていた。

「武装の展開が速いな。だいたい500時間の稼働で身についたみたいだな」

「正確には、503時間19分だけどな」

千尋の言葉に答えた影響は、ビックリ楽しんでいた。

「…………」

篝はモニターにつづる竜馬を見つめていた。

（私はまだ、お前と並ぶことが出来ないのか……竜馬……）

アリーナ・ステージ

「2機目貰い！」

一方、竜馬は2機目のビットの破壊に成功していた。

「そんな……！」

セシリ亞は驚いてるなか竜馬はラズライトを構え、セシリ亞の懷に飛び込もうとしてスピードを上げた。

「これで、終わりだ……「かかりましたわ！」……何？」

セシリ亞はニヤリと笑うと、腰部から広がるスカート状のアーマー

が展開した。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは6機ありますよ！」

しかも、先程のレーザー射撃を行ひビームではなく、ミサイル弾道型を放つた。

「くそつー！」

竜馬は咄嗟に両手の武器をミサイルに投げて直撃を免れたが、爆風により引きはがされた。

「初見でこいつまで耐えたのは、貴方が初めてですわね」

煙が晴れると、セシリ亞はビットを自分の周りに浮かべさせていた。

「ですが、貴方は武器も無く丸腰同然。わたくしに勝つ事は不可能ですわ」

「…………フツ」

セシリ亞の言葉に、竜馬は笑っていた。その瞳は、まだ勝負を諦めていなかつた。

「何が可笑しいですか？」

「いや、凄いなと思つてね。それに、本氣を出さないと失礼だと思つて……ね」

すると、竜馬の左手に一枚のセルメダルを出していった。

「だから、ちょっと本気をだすよ！」

そしてセルメダルをベルトの上にある投入口に入れ、右手をベルトの前にスライドさせた。すると……

カボーン！

ベルトから音が鳴り響き、白と緑が混ざった光の球体に身を包まれた。そして光が収まるとき、そこにいた。

黒いヘッドギアはH字型カメラアイとカプセル状のヘルメットが合体したバイザーに変化。

両手、両足、背中、胸と、合計10個のオープが付いた装甲。そう、オーバーズは姿を変えていた。

アリーナ・Aピット

Aピットでは、影宮以外が竜馬の変化に驚いていた。

「こ、これは！」

真耶はディスプレイを見て驚いた。そこにはオーバーズの情報が載

つてあると同時に、『《バース・モード》起動』と載っていた。

### アリーナ・ステージ

「な、ISの姿が変わった！？」

セシリ亞は目の前の事実に驚愕していた。ISの姿が変わるのは1  
フースト・シフト  
次移行しか知らなかつた。だが、竜馬のオーバーズはそれを済んで  
いる。

「さて…。行こうか、バース！！」

竜馬は相棒オーバーズ・バースモード（別名バース）の右手に展  
開した携行型火器を撃ちながらセシリ亞に突っ込んだ。

「くつ、ブルー・ティアーズ！」

セシリ亞はミサイルを発射するが、バースバスターによつて全て撃  
ち落とされた。そこにすかさず、ビットを2機多角的な直線起動で  
竜馬に接近させた。

「！」の距離なら、コレがいいかな…」

竜馬はバースバスターを収納すると、またメダルをベルトに挿入した。すると……

## 【CRANE ARM】

音声と共に、右腕にはクレーン状の武器が展開された。

「あらよつとー！」

竜馬はクレーンアームを降ると、先端のワイヤークレーンが発射され、2機のビットのスラスターを破壊した。

「なんですかー！」

セシリ亞が驚くなか、竜馬はクレーンアームをセシリ亞に向けて放つた。

「イ、インター セプターー！」

だがそこは代表候補生。クレーンが当たる直前、ショートブレード『インター セプター』で受け流した。

「あやつー！」

だが竜馬のパワーが高く、セシリ亞はインター セプターを落としてしまった。

「よしつー！」

竜馬は攻撃を当てたことに、ガッシュポーズを取った。

「迂闊でしたわ……。わたくし、貴方を侮っていましたわ」

「そりやどうも」

すると、竜馬はクレーンアームを収納してバースバスターを展開させた。

「僕には、もう失いたくないものがいる。守りたい友がいる。いまはまだ自分の手が届く程しか守れないけど、それでも…命に変えて守つてみせる！」

そう言いながら、竜馬はバースバスターのバレルポッドを銃口に接続した

「……そうですか」

セシリ亞は目を閉じた。自分よりも大きな負けられない理由を聞き、彼の勝負に賭けた覚悟を聞き、セシリ亞は思った。  
強くなりたい……竜馬のようになろう。

「…………なれますか？」

「ん？」

「わたくしも、貴方のように強くなれますか？」

すると、竜馬は笑顔で答えた。

「ああ、強くなれるぞ。だけど、今はこの勝負が終わってからだね！」

「！？……そうでしたね。なら、わたくしの全力を、貴方にぶつけます！」

そう言つたセシリアはシールドエネルギーを僅かに残し、全てをスター・ライトモードに注いだ。

「そりゃ、だつたら僕も、応えないとね！」

### 【CELESTIAL BURST】

竜馬はバースバスターのトリガーを引くと、強力なエネルギー弾が発射された。

「コレが、わたくしの全力ですわ！」

同じく、セシリアも最大出力のレーザーを発射した。

ドカアアアアアン！

2つの弾丸は巨大な爆発をして2人を巻き込んだ。

「ピィイイイイイ！」

そして終了のブザーが鳴り響くと、煙は晴れて2人は浮かんでいた。  
そして……

『勝者、龍東 竜馬！』

勝負が決まった。

アリーナ・アピット

「ふう。なんとか勝てた……」

竜馬がピットに着くと、影宮は竜馬に近づいた。

「よつしゃーよくやつたぞ竜馬ー。」

「影宮やん。どうでしたか？」

「ワンオフ・アビリティー

「初陣としては上々かな。バースC L A W sの单一仕様能力も出来てたみたいだし。まあ強いて言つなら、他のC L A W sも披露してほしかつたなー」

「ははは、頑張つてみます」

竜馬は苦笑いをすると、オーバーズを待機状態のメダルにした。ちなみに、バースのワンオフ・アビリティーは『エネルギー・ドレイン・アタック』（略してE・D・A）と言い、C L A W sの攻撃に当たつたI Sや武器のエネルギーを、バースのシールドエネルギーに変換する能力である。

「竜馬…」

「あ、第…」

竜馬は第に気付くと、ゆっくり近づいた。

「第、勝つたよ」

「ああ、よく頑張つたな」

2人は拳と拳を突き出すと、笑いあつた。

「いいお友達ですね」

「……そうですね」

真耶の返事に千冬は応えたが、別の事を考えていた。

(2次移行無しで姿を変えるISなんて聞いた事が無い。それに、セカンド・シフト  
ベース・モードになる前の姿。あれではまるで……)

千冬はオーバーズが初めて展開された姿を、あるISと重ねていた。  
細部は若干違うが、それは自分が初めて纏つたISに酷似していた。

(まさかあれは……)

「織斑先生……、どうかしましたか?」

「ん?いや、何でもないですよ山田先生。私は先に戻りますので、  
これで……」

そう言つと、千冬はピットから出ていった。

（夜）

### 寮 セシリ亞の部屋

その夜、あのクラス代表決定戦が終わったセシリ亞は、シャワーを

浴びながら物思いに耽っていた。

(負けて……しまいましたね……)

負けてしまった……。だが不思議と後悔はしなかった。

(……)

セシリ亞は龍馬のことを思い出す。誰にでも向ける優しい笑顔と、強い意志の宿った瞳を。

他者に媚びることのない眼差し。それは、不意に自分の父親を逆連想させた。

(父は、母の顔色ばかり伺う人だった……)

幼少の頃からそんな父親を見て、セシリ亞は『将来は情けない男とは結婚しない』と決めていた。

しかし……

(……龍東、……龍馬……)

彼は自分に勝つた。セシリ亞は龍馬の強い瞳に、その言葉に呑まれていった。

『命に変えて守ってみせる!』

『ああ、強くなれるや』

父とは正反対のように強く勇ましい瞳が、あの優しい笑顔を忘れられなかつた。

「龍東、竜馬……」

セシリアは竜馬の名前を口にしてもみると、胸が熱くなるのを感じていた。

どうしようもなくドキドキとして、そつと自分の唇を撫でてみると、形のいい唇は触れられる」とを望んでいたかのように不思議な興奮を生み出した。

（わたくしは知りたい……もっと貴方のことを…………竜馬さん……  
…）

浴室には、ただただ水の流れる音だけが響いていた。

休み時間 教室

（翌日）

S H R でクラス代表が発表され、休み時間にはクラスメートが竜馬の前に来て話をしていた。

「コレでクラス対抗戦が面白くなるね」

「そうだよねー。せつかく世界で唯一の男子がいるんだから、同じクラスになつた以上、持ち上げないとねー」

「私たちは貴重な経験を積める。他のクラスの子に情報が売れる。1粒で2度おいしけ、龍東くんは」

クラスメートの話に、龍馬は苦笑いをするしかなかつた。

「あの、龍馬さん……」

すると、龍馬の下にセシリアがやつてきた。

「やあ。先日はお疲れ様、オルコットさん」

(…龍馬…さん?)

篝はセシリアの言葉に違和感を感じた。

「は、はー。…………そのことなのですが……申し訳ありませんでしたー!」

セシリアは急に、深々と頭を下げた。

「わたくしが少々、冷静さが欠けていたために、あのような失礼なことを……」

「ああ、気にしてないよ。あの時、僕も酷いこと言つちやつたし…

… IJF ちいさな「メン」

「…………お優しいのですね」

竜馬の謝罪に、セシリアは頬を赤くして小さく言った。

「ん？」

「な、なんでもありませんわ。それで、宜しければもう一度、自己紹介をさせていただけませんでしょうか」

「ああ、構わないよ。改めまして、龍東 竜馬だ。よろしく」

「わたくし、イギリス代表候補生のセシリア・オルコットです。セシリアと呼んでください」

2人は握手をすると、竜馬は利き腕の拳握った。

「ん」

「え？」

竜馬はセシリアにも同じように拳を作らせると、竜馬はセシリアの拳を自分の拳に突き当てる。

「これで今日から親友だね。よろしく、セシリア」

親友の証をした竜馬は、セシリアに笑顔を向けた。すると、セシリアは竜馬の利き手を両手でしつかり握った。

「はい！あの……そ、それでですわね、本田の放課後……ふ、ふたりつきりで特訓を」

バンッ！

いきなりの音に驚いた竜馬は、音の方に目を向けた。そこには、異様に殺氣立つた瞳をした筈だった。

「あいにくだが、竜馬の相手は足りてない。“私が”、直接頼まれたからな」

“私が”を特別強調した筈はセシリアを睨んだが、セシリアは正面から受け止めて視線を返していた。

「あら篠ノ之さん。貴女が竜馬さんに教えるより、わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間が特訓に付き添えば、それはもうみるみるうちに成長を遂げますわ」

「なんだとっ！」

「なんですかー！」

竜馬は筈とセシリアの様子を見て、ヤレヤレと心で思つた。

「ねえ、りゅーくん。止めなくていいの？」

「まあ親友と親友のじゃれあいみたいだし、大丈夫だよ。いやー、仲良しひは良いことだねー」

「「私はこいつ（この人）と仲良じじゃないー（ありませんわ！）」

」

竜馬の言葉に、篝とセシリアは同時に言った。

メルダ・ファウンデーション 地下技術開発室

同時刻、メルダ・ファウンデーションの地下にあるHSの技術開発室で、ある開発をしていた。

「影富局長。全セルメダル1500枚の準備が完了しました」

1人の研究員は影富に近づき報告した。

「そうか。では、起動だ」

「はい！」

研究員は走り去ると、影富はアクリルケースに入れられた物を見た。それはセルメダルとは違い、15枚全てに色があるメダルだった。

「起動開始！」

影宮の発言により、研究員はレバーを引いた。すると、別室で用意された1500枚のセルメダルは光の粒子となり、ホースを辿って15枚のメダルに吸収されて激しく輝いた。

「…………」

光が収まると、影宮はアクリルケースにある赤いメダルを手に取つた。

「これでコアメダルの完成だ。あとは竜馬に届ければ……」  
ハハハッ

そう言つと、影宮は子供のような笑みを浮かべていた。

## オリジナルE/S設定（随時更新）（前書き）

タイトル通りです。

話が進むに連れて増えていくと思います。

## オリジナルIS設定（隨時更新）

機体名：オーバーズ

操縦者：龍東 竜馬

開発者：黒木 影宮

待機状態：メダル

特殊機能：メダルチェンジ

基本装備  
プリセット

エネルギー刀

ラズライト

狙撃ライフル  
アーガンジャー  
双槍

後付武装  
イコライザ

ショートアックス《バーンブレイズ》

薙刀《真機鉄》

マシンガン《カービンM5S》

ショットガン《ライオットS3》

ビームガン《マグナムブラスター》

ビームマシンガン《アサルトAR4C》

ハンドガン《スカウト》

ハンドガン《レッドホーク》

ライフル《シュータースR35S》

レーザーライフル《プリズム》

ビームショットキャノン《メテオ》

ハイパー・マシンガン  
実弾機関銃

ハイパワーガトリング  
レーザー機関銃

ショットキヤノン《アース》

4連ランチャー《フォークラスター》

広範囲爆撃ランチャー《メガデス》

高電圧弾ランチャー《ブリッツ》

大斧

ブースター内蔵型斧

高電圧ハンマー《タケミカヅチ》

苦無

エネルギーナイフ《カレッカ・エッジ》

打突強化鉄甲

各種グレネード

各種カンドロイド

両肩と背中に甲冑のような非固定浮遊部位型の推進機が合計3機、  
腰部にメダルチェンジツール《オーバーズ・ドライバー》を装着しているのが特徴の万能型IS。

拡張領域が第2世代ISの4.6倍だが、高いコストを持つメルダ  
製の武器のみを量子変換しているので、それほど空いてない。

特殊機能は、ドライバー上にあるセルメダル投入口と、ドライバー正面にある3つのメダルをはめ込む溝にコアメダルを入れることで、オーバーズの姿と性能が一気に変化させる。

## オーバーズ・バースモード

プリセット  
バーススター<sup>バーススター</sup>  
携行型火器

イコライザ  
バースC LAW S  
グレネード各種  
カンドロイド各種

ワンオフ・アビリティー：《エネルギー・ドレイン・アタック（E・D・A）》

オーバーズがドライバーにセルメダルを投入して変化した姿。

背中のスラスターが無くなりスピードは落ちたが、全身に装甲が付加されて防御力が上昇している。

バースモード状態ではプリセットはバーススターのみになり、イコライザが専用武器《バースC LAW S》に変化され、グレネードとカンドロイド以外のイコライザが仕様不可能になる。

ワンオフ・アビリティー『E・D・A』は名前通り、一部のバースCLAWSを相手EISか武装に当てる事でエネルギーを自身のシリドエネルギーに変換する。

### バースCLAWS

両腕と両足、胸と背中、合計6個で構成されているバースモード専用武装。

威力が高く、一部の武装でワンオフ・アビリティーを発動させる。

#### ・クレーンアーム

右腕に装着される武装。ワイヤーフックを伸ばして離れているモノに当たり、引き寄せたりする。

## 〇三話【ホカヒヒペーティーとノムメダル】（前書き）

第3話ができました。

タイトル通り、曲字は変えてますが、あのキャラが出来ます。

それと、メダル関連のネタや兵器も出してこうてますので、分かつてくれたらうれしいかも。

それではじりぞー！

## 〇三話【オカマとパーティーハマメダル】

6時間目 第1アリーナ・ステージ

4月の下旬、竜馬達は第1アリーナにて授業を受けていた。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。龍東、オルコット。試しに飛んでみせろ」

千冬の言葉に竜馬達はすかさず反応し、ISを展開させた。尚、竜馬との対戦で損傷したセシリ亞のブルー・ティアーズに装備されているビットは、完全に修復が終わっていた。

「龍東、お前はベースモードに変更しろ。その状態のスピードは見たが、ベースの状態はそんなに見てないからな」

「分かりました。では……」

竜馬はセルメダルを出すとベルトに投入して、右手をベルトの前にスライドさせた。

力ポーン！

光の球体に包まれると、オーバーズは姿を変えてベースになった。

「よし、飛べ」

千冬は確認すると、竜馬達に指示をした。2人は急上昇するが、若干竜馬は遅れていた。

『どうした。データ上の出力ではオーバーズの方が上だぞ』

千冬は通信回線から竜馬に言った。

「モードが変更して出力が減ってるんですよ。CLAWSを展開すればデータと同じぐらいになりますが……」

『そりゃ。よし、いいだろ。展開後は最高速度で飛んでみる。いいな』

竜馬は「はい」と答えると、竜馬はセルメダルをベルトに入れた。

## 【CUTTER WING】

音声と共に、背中には鋭い刃がある翼状の武器<sup>カッターウィング</sup>が展開され、ブースターを起動させた。

『お速いですわね』

飛行中、セシリ亞は個人間秘匿通信を開いた。  
プライベート・チャンネル

『まあ、ウイング自体は微調整すれば今よりも速くなるけど、僕の腕じゃあ、まだコレが精一杯かな』

言いながら竜馬は旋回飛行をしていると、セシリ亞に近づいて話し

掛けた。

「セシリアは放課後、予定あるかな？狙撃の訓練をするから指導してほし…」「本当ですか！」「……」「うん」

竜馬の言葉を遮る様に、セシリアは驚きと嬉しさの顔をして言った。あの試合以降、何かと理由を付けては竜馬と練習をしており仲が縮まっていた。しかし竜馬に対しても態度が柔らかくなつた分、筈に対する硬くなつていた。

「分かりましたわ。それでは放課後、第3アリーナでしましょ」

『竜馬っ！いつまでそんなところにいるー早く降りてー』

いきなり通信回線から怒鳴り声が聞こえたので、竜馬は驚いた。すると地上では、真耶がインカムを筈に奪われてオタオタしていた。

『2人共、急降下と完全停止をやつて見せろ。目標は地表から10cmだ』

「了解です。では竜馬さん、お先に」

そう言つとセシリアは直ぐさま地上に向かい、完全停止を難無くクリアした。

「流石だね。んじゃ、僕も……」

それを確認した竜馬も急降下するために速度を上げた。

(よし、ここで停止準備)

だが、地表50cmに来たところでトラブルが起つた。

ガンツ！

「痛つ！」

ドスツ！

竜馬は急に後頭部を痛みに襲われた。そのせいで、地上に俯せで墜ちてしまった。

「らしくないぞ、竜馬」

「痛つ。何だ何だ？」

腕を組み両尻をつり上げている竜馬をよそに、竜馬は後ろを見た。

『キューイー！』

そこに飛んでいたのはタカ・カンドロイドだったが、色は赤ではなく黄色になっていた。

（黄色のタカ！まさか……）

竜馬は黄色いタカ・カンドロイドを見て、ある人物を思い出した。

「竜馬、聞いてるのか！」

簾の言葉に竜馬は我に返ると、簾は続けざまに言った。

「どうしたんだ竜馬。らしくないしつぱ……」「大丈夫ですか、竜馬さん？お怪我はなくて？」……ムツ……」

簾の言葉を遮るように竜馬の前にセシリアが立ち、竜馬に手を差し出した。

竜馬はその手を取ると、姿勢制御をして上昇した。

「ああ、あの高さぐらい大丈夫だよ……」

「そう。それは何よりですわ」

セシリアは「うふふ」と楽しそうに微笑むと、それを見た簾は不機嫌そうに言った。

「…………IHSを装備していく怪我などあるわけがないだろ？…………」

「あら、簾ノ之さん。他人を気遣つのは当然のこと。それがIHSを装備していても、ですわ。常識でしてよ？」

「お前が言つたか。この猫がぶりめ」

「鬼の皮を被つていいよつマシですわ」

バチバチバチッ

2人の視線が激しくぶつかり、火花を散らす様だった。

クラスの大半の女子はその様子を見て“、男子を取り合つよつた場面”として見ていたが……。

(うーん。ハイパー・センサーにこんな機能あつたっけ?)

しかし、その男は全く別の事を考えていた。

「あのタカは……もういないか……」

竜馬は辺りを見ると、黄色いタカ・カンドロイドはいなくなっていた。

「おい、馬鹿者共。邪魔だ。端っこでやつてい!」

すると、千冬は箒とセシリ亞の頭をぐいっと押しのけて、竜馬の前に立つた。

「龍東、その状態で武装を展開しろ」

「はい」

「よし。では始めろ」

そう言われ、竜馬は辺りに人がいない事を確認すると、相手に銃火器を向けるイメージをした。そして一瞬爆発的に光ると、その手にはベースバスターが握られていた。

「いいだろ。次は近接武装を展開しろ。確かCLAWSにしか無かつたな」

「分かりました。では…」

竜馬はバースバスターを収納すると、セルメダル2枚を取り出して、ベルトに投入した。

### 【CATERPILLAR LEG】

### 【SHOVEL ARM】

音声と共に、左腕には巨大なショベル状の武器と、両足には無限軌道型移動補助武器が展開された。

展開が完了すると、竜馬はキャタピラレッグで移動しながらショベルアームを豪快に振つて、更にキャタピラレッグによる蹴り技を披露した。

「ふむ……。基本武器の展開は悪くないがCLAWSはその倍か…。時間短縮が出来ないのは厄介だな」

「通常の展開とセルメダルによる展開ではシステムが違い過ぎますので……。すみません」

「まあいい。セシリ亞、武装を開いて」

「はい」

セシリ亞は左手を肩の高さまで上げ、真横に腕を突き出した。一瞬爆発的に光ると、その手にはスター・ライトマークが握られていた。

「流石だな、代表候補生。……ただし、そのポーズはやめる。横に向かつて銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがコレはわたくしのイメージをまとめるために必要な…」「直せ。いいな……っ……はい」

セシリ亞は反論の余地は大いにあるよつたな顔をしていたが、千冬の一睨みによつて話が終わつた。

「次は近接用の武装を展開しろ」

「は、はい……」

(…ん?)

竜馬はセシリ亞の顔色が変わつたことに気付き、試合の時にインター・セプターを開ける際、時間が掛かっていたことを思い出した。

(時間が掛かるといつことは、今まで射撃戦闘しかしてないのかな。こりゃあ、狙撃訓練のお礼に近接訓練をしてあげよつかな……)

そう思つと、ヤケクソ氣味にインターフォンを叫んだセシリ亞に気が付いた。

「…………何秒掛かっている。お前は、実戦でも相手に待つてもうう

のか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせませんーですから、問題ありませんわー。」

「ほつ…。龍東との対戦では懐に入り込まれそうな場面がいくつか見られたが?」

「あ、あれは……その……」

セシリ亞の言葉は歯切れの悪くなり、「ハーハーハーハーハー」と叫びついていた。

竜馬はその様子を見ていると、セシリ亞にキューと睨まれ、プライベート・チャンネルが送られた。

『貴方のせいですわよー!あ、貴方が…………わたくしに飛び込もうとするから…………せ、責任を取つていただきますわー。』

「?」

セシリ亞の言葉に、竜馬は頭を傾げた。

「…………時間だな」

千冬は腕時計を見ると、授業の終了間近だった。

「今日の授業はここまでだ。すぐに着替えて教室に戻るよ!」

千冬はそう言つと、女子全員は更衣室に行つた。尚、竜馬は反対方向の更衣室へ行つていた。

放課後 ゲート前

「おかえり～タカちゃん」

授業終了の1時間後、ゲート前には背中に三日月のエンブレムが付いていた黒いジャケットを着た、ガタイの良い男がいた。その男の手には、黄色のタカ・カンドロイドが置かれていた。

「竜馬ちゃんの授業は終わつたみたいねつ んじや、会いに行きましょー！」

男はゲートを潜り、クネクネと歩いて行つた。

「…………」

竜馬は現在、地表約100mにあるバルーンを狙撃ライフル《ドミニオン》で狙っていた。

周りには、バルーンの破片がいくつもあり、元の数が多いのが分かる。

バンッ！

すると、ライフル特有の音が鳴り響き、少し遅れて最後のバルーンが割れた。

「ふう……」

「素晴らしいですわ、竜馬さん」

「いや、ここまで出来たのはセシリアのおかげだよ。ありがとう」

「い、いえ……それほどでも……」

竜馬の言葉に、セシリアの顔は赤くなつた。

「それじゃあ、次は近接訓練をしようか」

「あの……、わたくしは余り近接戦闘は……」

「大丈夫だよ。僕も近接武装を開拓するから同じだ」

そう言つと、両手にはエネルギーナイフ《カレッカ・エッジ》が握られていた。

「……分かりましたわ。では、お手柔らかにお願いしますわ」

セシリ亞もインター セプターを展開させた。

「それじゃ、行く……『龍東くーん！』……ん？」

竜馬は声の方に振り向くと、真耶がこちらに近づいていた。

「山田先生。どうでしたのですか？」

「あの――龍東くんにお客様が来ているのですが……」

「お客さん？」

「でも……あまりにも怪しい動きをしていたので、警備員の方たちと一緒に応接室に待たせているんです」

(…………まさか)

竜馬は確信してしまった。1時間前に見た黄色いタカ・カンドロイド、怪しい動きの男、それらのキーワードが完全に一致する人物を知っていた。

「分かりました。今から向かいますね」

「はい。それじゃ、先生は会議があるから」

真耶の姿を見届けると、セシリアが近づいていた。

「どうかしましたか？」

「ああ……。僕にお姫さんができるって言われたから、ちよつと行ってくるね」

「でしたら、わたくしも一緒に行きますわ」

「あー……まあ、こいナビ……」

「…………？」

竜馬の態度に、セシリアは不思議そうに思った。

「えじや、ピットに戻つたら通路の自販機で待ち合せようか」

「ええ、分かりましたわ」

そして、2人はそれぞれのピットに戻つた。

「あれ？ 篠」

着替えた竜馬は待ち合せ場所に着くと、篠と鉢合わせた。篠は部活後なのか、胴着姿だった。

「訓練は終わったのか？」

「終わつたといつか、なんかお客さんが来たから中断したんだ」

「客？ 影面やんか？」

篠がそいつと、竜馬は憂鬱そうな表情をした。

「いや、違うと思つ。多分、予測が正しかつたらお客やんせ……」「竜馬やーん」「……」

竜馬の言葉を遮り、セシリアがやつてきた。

「あら、篠ノえさん。何かわたくし達に用ですか？」

「…………竜馬、どうこいつことだ？」

篠は竜馬に話しかけると、不機嫌オーラが垂れ流していた。

「ん？ ああ、セシリアも一緒に行くんだって。そういうえば、篠は何処に行くんだ？」

「私は職員室に用がある。それだけ……」

言いかけるが、篠は手を口に当てるて考えていた。

「……篠？」

「よし、私も一緒に行こう」

「なつー！」

篠の言葉にセシリアは驚いた。

「篠も？まあ応接室は職員室に近いから……。セシリアも良いよね？」

「え、ええ……いいですわ」

まごついたセシリアだが、心中では少し余裕だった。

（まさか篠ノえさんに出会うとは、予想外でしたわ。でも、竜馬さんとの実戦訓練はわたくしとしか一緒にできませんですし、まだまだ余裕ですわ！）

対して、篠は少し焦っていた。

（セシリアも一緒だつたとは……。早く訓練機の使用許可を貰わないと、竜馬ともつと一緒にいられなくなる！）

一方、竜馬はある人物の事を考えていた。

（「じつて女子しかいないからなー。あの、大人しくしてくれるかなあ……」）

3人はそれぞれ思いながら、応接室に向かつた。

### 応接室

3人は応接室の前に来ると、竜馬はドアをノックした。ドアが開くと、そこには千冬が立っていた。

「来たか。ん？ 篠ノ之とオルコットも一緒に……」

「織斑先生。どうしてここに？ 警備員がいるつて山田先生が……」

「ああ……。アイツが担任を出せといひから、私が呼ばれたんだ。そのあとで戻つて行つた」

「竜馬ちゃん！ 久しぶりねえ～」

すると、千冬の背後から声が聞こえた。そこにいたのは、ゲート前にいた男だった。

「ひ、久しぶりです、京水さん」

竜馬は男……京水の名前を呼ぶと、京水はクネクネ動きながら「ち

らに来た。その動きを見た3人は若干引いていたが、セシリアは竜馬に話し掛けた。

「あ、あの……竜馬さん。」ちらの方は……」

「あ、ああ……。」この人はメルダでIIS武器開発局の主任で……」

「須藤京水よ。よろしく あんた達は……竜馬ちゃんのお友達？」

「は、はい。わたくしはイギリス代表候補生のセシリア・オルコットと申します。」

「……ジー……」

すると、京水はセシリアをジーっと見つめた。

「あ、あの……「いい身体してるじゃな~い」……えつー?」

京水の言葉にセシリアは数歩下がつたが、京水は同じ歩数で近づいた。

「でも……私の方が……おっぱい大きいわ……」

「あ、あ、貴方!! 初対面で失礼じやありま 「私の方が、おっぱい大きいわ!!」 ひいつー?」

京水の叫びにより、セシリアは竜馬の背中に隠れた。

「つょ、竜馬……大丈夫なのか、あの変なオッサン 「変なオッ

サン！　うわっ！…

篠の言葉により、京水は血相を変えて篠に近づいていきました。

「言つたわねつ！！あんたレディーに対して最大の侮辱をつ！！ムツキイイイイイイイイイ！」

「し、失礼しました！？」

京水の豹変ぶりに、篠は謝罪をしながら龍馬の背中に隠れた。

「あーヨシヨシ。……京水さん。僕に何か用事ですか？」

龍馬は篠とセシリ亞の頭を撫でながら、京水が学園を訪問した理由を聞いた。

「あらいけない、私つたら熱くなっちゃったわ……。はいコレ

すると京水はリュックの中から黒いホルダーと資料を取り出すと、龍馬に渡した。

「コレって……まさか！」

龍馬はホルダーの中を確認した。そこにはカラフルなメダルが15枚と、セルメダルが9枚はめ込まれていた。

「そう！コアメダルが完成したから持ってきたわ」

「そりだつたんだ。でも、完成したら影宮さんが持つてきそうだけどなあ…

「影宮ちゃんに頼まれたのよ。実際はそうしたかったみたいだけど、急な仕事が入っちゃったからね~」

京水はクネクネと動きながら言った。

「あと、明日は土曜日よね。昼頃に影宮ちゃんが来てコアメダルの性能テストするみたいだから、予定空けといてね」

「そうですか。分かりました」

「それじゃあ私は帰るわね。早く帰つて新しい武器の最終調整しないといけないから……じゃあね、竜馬ちゃん！」

京水はヌルヌルと動きながら応接室を出た。

「……大丈夫？ 2人とも」

竜馬は簫とセシリアの心配をした。

「す、凄い剣幕だった……」

「い、怖かったですわ……」

2人を見て、竜馬は苦笑いをするしかなかつた。

夕方 寮 竜馬・筈の部屋

京水と別れた後、竜馬とセシリアは寮に戻ってきて部屋にいた。筈は「どうぞ、職員室に用があるので今はいなさい。

「コレが、コアメダル……」

竜馬はメダルホルダーにある赤いコアメダルを手に取ると、じっくり見えた。

「…………」

「竜馬さん。どうしましたか?」

「ん? ああ、ゴメン。やつとオーバーズのコアメダルが届いたからじっくり見てた」

「…………一つ聞いても、いいですか?」

「何?」

「このメダルって、一体何ですか? 試合の時や、今日の授業にも使つていましたし」

セシリアはメダルホルダーのメダルを指差した。

「やつだなあ……」

竜馬はそつと、セルメダルを手に取った。

「これはセルメダル。バースモードに展開する時に使う他、C-AW'sの展開、バーススターの弾丸にも使つメダルだよ。あと他に……」

良いながら、竜馬は机に置いてある水色の缶を手に取った。

「コレを貰つのも使うかな

【TAKO KAN】

『タコー』

プルタブを開けると、脚を回転しながら飛んでいるカンドロイド…タコ・カンドロイドを起動した。

「まあ！かわいらしいですわ

「よかつたらあげようか？あ、でも新しい方がいいか　　「ほ、本当ですのー。」「な……ん？」

竜馬はセシリアを見ると、眼をキラキラさせて竜馬を見ていた。

「いや、いつもの物を貰つてもいいこんですのー。」

「え？ 新しい方がいいとおも  
すわ！？」……そ、そう？」  
「いえいえいえ、それが良いので

「はい！」

「まあ……良いか。はい」

竜馬はタコ・カンドロイドを元に戻してセシリアに渡した。

「ありがとうございますーーー一生大事にしますわーーー」

セシリアはタコ・カンドロイドを大事そうに持つた。

ガチャ

「……何をしている」

部屋の扉が開く音がすると、少々珍機嫌な篠が制服姿でいた。

「おかえり篠。用事は終わったの？」

「ああ。訓練機の使用許可を貰つたぞーー今度の訓練は、剣道から工  
Sに変更だ」

篠は許可書を竜馬に見せていると、セシリアは心中で焦っていた。

（くつ……一まさか、こんなにあつさりと訓練機の使用許可が下り  
るだなんて……。コレでは、竜馬さんとふたりっきりの時間が大幅

に減つてしまいますわー。)

「…セシリア、どうかした？」

「い、いえーなんでもありますわー。」

「アハハ…んじゃ、アメメダルにては食堂で話すよ。

やつぱりと、竜馬は立ち上がって部屋を出た。

「おー竜馬ー私は帰ってきたばかりだぞ。少し待て……うむー。」

「う、竜馬さんーお待ちになつてー。」

竜馬を追いつき、筿とセシリアも部屋を出た。

## 食堂

竜馬達は食堂に着くと、それぞれ夕食を持って同じテーブルに座った。ちなみに筿は焼き魚定食、セシリアはパスタ、そして竜馬は和風おりしハンバーグ定食だ。

「…成る程な。つまりコアメダルはオーバーズの装甲を完全に変化するメダルなのか」

「うん。資料には確か、セルメダル100枚分の力があるコアメダルを3枚使って、オーバーズを変化させるんだ。この場合は変身つて言うのかな…」

「100枚ですか……。随分お高いですわね……」

セシリアは食堂に着く前に、セルメダルの値段について質問していた。

セルメダル1枚の価値は、日本円で約1万円と言っていた。その100枚分で作られたコアメダル15枚で1500万円……。1体のISにそれほど資金を注ぎ込むとは、セシリアはとても驚きを越えて呆れたようになってしまった。

「そういえば、2人は明日どうするの？僕は性能テストをするから特訓が出来ないけど…」

すると、篝は頬を赤くして言った。

「け、見学しても良いか？」

「ん？別に良いけど……」

「やうか…よし……部活の用事が終わったらすぐ行くぞ

「ああ、分かった…」「でしたら、わたくしも見学しますわー」…ん、セシリ亞も？」「

竜馬の言葉を遮るよつて、セシリアも若干頬を赤らめて言った。

「ああ、いこむ」

「ありがとうございます（篠ノ之さん……。竜馬さんとふたりっきりにはさせませんわー。）」

3人は約束を交わすと、夕食を食べ終えて部屋に戻った。

竜馬・筈の部屋

「やうだ。筈、コレを持ってて

2人は部屋に戻つてくると、竜馬は緑色のカンドロイドを筈に渡した。

「ん?このカンドロイドは何だ?」

「用事で遅くなつたりしたら、それで連絡して

「ほう。連絡手段に使うカンドロイドか?」

〔BATTAKAN〕

篇はカンドロイド……バッタ・カンドロイドを起動すると床でピョンピヨンと跳ねた。

童馬はバッタ・カンドロイドを手に取ると、オーバースのメタルをバッタ・カンドロイドに当てた。

「これで僕のプライベート・チャンネルとリンクしたから、いつでも連絡ができるよ。はい」

「そつか。その……………ありがと」

「ふふつ。どういたしまして」

ג'ג'ג'ג'ג'ג'

「ん? 誰だろ?」

龍馬はノックの音に気付くと扉を開けた。

「ヤツホー、龍東くん」

「相川さん。どうしたの？」

扉を開けると、そこには清香がいた。

「実はね……1組全員は食堂に集合つて言われてるから、  
わつたら来てね。それじゃ、私は先に行くね」

清香は手を振りながら去つていった。

「どうしたんだ？」

なんか1組は食堂に集合だって

— そ う の か。  
— で は、  
— 行 く と す る か。」

—ああ、行こうか

2人は部屋を出て、食堂に向かった。

夜  
食  
堂

「どうわけでっ！ 龍東くんクラス代表決定おめでとうー。」

「「「「「おのぞか〜。」」」

パン、パンパン！

「…………えつ？」

食堂にやつてきた竜馬は、突然のクラッカー乱射に啞然とした。食堂には確かに1組のメンバーが揃つており、壁にはデカデカと『龍東 竜馬クラス代表就任パーティー』と書いた紙がかけていた。

「さあさあー主役はこっちに座つてね。あとコレね」

クラスの1人が竜馬を上座に座らすと飲み物を渡した。竜馬の両隣には筈とセシリ亞が座つていた。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと。ラッキーだつたよねー。同じクラスになれて」

各自飲み物を手にやいのやいのと盛り上がりしている中、竜馬は辺りを見渡した。

（明らかにクラスの人数が多過ぎるなあ……。あつちにいるのって2組の人だし……）

「人気者だな、竜馬」

竜馬の隣にいた筈が話しかけたが、少し不機嫌そうにしていた。

「ん? どうだろ? なあ……。男がクラス代表になつたから珍しがつてるだけじゃないかな?」

そう言って龍馬はジユースを飲んだ。すると、龍馬に近づく女子がいた。制服には黄色のリボンをしていたので、2年生だと分かった。

「はいはーい、新聞部でーす。話題のイケメン新入生、龍東 龍馬君に特別インタビューをしに来ました～！」

新聞部が来た事にクラス一同は盛り上がった。

「あ、私は2年の薫 薫子。新聞部副部長やつてまーす！はいこれ名刺」

「あ、これはどうも……」

「ではではズバリ龍東君！・クラス代表になつた感想を、ビビッヂー！」

薫子はボイスレコーダーをずっとと竜馬に向けて、無邪気な子供のように瞳を輝かせた。

「えーと……な、なつたからには、優勝目指して頑張ります！」

「おーいいね～。捏造のしがいがあるよ

（本人の前でスゴイ」と叫ぶなあ……）

そつ思うなか、次に薫子はセシリアにボイスレコーダーを向けた。

「それじゃあセシリアちゃん。龍東君と試合した時のコメントすうだい

「わたくし、いつもこのコメントはあまり好きではありませんが……」

…仕方ないですわね

と言いつつ、セシリアは満更でもなかつた。

「コホン。ではまず、わたくしが　　「ああ、長そつだからいいや。  
[写真だけちょうだい」　　つて…や、最後まで聞きなさい…」

「いいよ、適当に捏造しておくから。よし！龍東君の強さに惚れた  
からってことじよつ」

「なつ、な、ななつ……！？」

薫子の一言に、セシリアは顔をボツと赤くなつた。薫子は眞にする  
ことなく、懐からデジカメを取り出した。

「はーはー、とつあえずふたりなりんでねー。[写真撮るから

「ん？」

「えつ？」

2人は薫子の言葉に反応した。しかし、セシリアはどこか喜色を含  
んで弾んでいるようにも聞こえた。

「注目の専用機持ちだからねー。ツーショットもひつよ。あー握手  
とかしてるといいかもねー」

そつ言いながら薫子は竜馬とセシリアの手を引いて、そのまま握手  
まで持つて行つた。

「あ…………」

握手をすると、セシリアは頬を赤くして竜馬をジロジロと見た。

「へ、どうしたの？」

「べ、別に、何でもあつませんわ」

「…………む」

それを見ている筈は、不機嫌オーラ垂れ流しだった。

「……筈？」

「何でもない」

そう言って、筈はそっぽを向いた。

「それじゃあ撮るよー。40×13÷1000はー？」

「えっと……0・「ぶー、時間切れ。0・552でしたー」

そんな……」

パシヤツ

デジカメのシャッターが切られると、竜馬は周りを見た。

「みんな凄いなあ

なんと！1組の全メンバーが撮影の瞬間に、竜馬とセシリ亞の周りに集結していた。ちなみに、竜馬のすぐ隣には篠が立っていた。

「あ、あなた達ねえつー！」

「まーまーまー」

「セシリ亞だけ抜け駆けはないでしょーー！」

「クラスの思い出になつていーじやん。ねー」

「まーまーまー」

「う、ぐ……」

クラスメートは一矢一矢とした顔で口々にセシリ亞を丸め込むように言つた、セシリ亞は苦虫をかみつぶしたような顔をしていた。

「…………？」

竜馬はその様子を見て首を傾げた。

かくして、就任パーティーは夜10時過ぎまで続くのだった。

～翌日～

## 昼 食堂

「 「 「 いただきます」 」 」

土曜日、午前中の授業が終わって竜馬達は昼食を取っていた。ちなみに、筈はうどん、セシリ亞はサンドイッチ。そして竜馬は、洋食器に入っているラーメンだった。

「竜馬さん。何故ラーメンをフォークで食べのですか？」

「セシリ亞、コレはラーメンじゃないよ。ラ・メーンだよ」

「ラ、ラ・メーン…ですか？」

「うん。そもそもラ・メーンは

「おつ・見つけたぞ」 …ん

？」

食堂にいた生徒は、全員その声の方を見た。そこには、影宮だつた。

「影宮さん。もう来たんですか？」

「まあな。早くオーバーズを改修したくて、早めに来た

「やつだつたんだ……」

「ああそれと、『イツ達もな

影富は寝から2個カンドロイドを取り出したが、通常とは異なっていた。

一つは、上下が赤と黒のカンドロイド。もう一つは、上下が黒と金のカンドロイドだった。

「起きなイメージ、シベラー

## 【AI KAN】

影富はフルタブを開けた。すると起動したカンドロイドは側面に小さな画面が出でくると、両横に小さな腕、底面には小さな足が出てきた。

『（～～）ふあ～…。よく寝たぜー』

すると、赤と黒のカンドロイドから声がすると、上には2本の小さな赤いツノが生えて、画面には顔文字が映つていた。

『 [ ] おはよひりやこます、マスター』

さうじ、黒と金のカンドロイドからは後ろに小さな金色の羽が生えて、画面には某爆弾男のような顔が映つっていた。

コレが、カンドロイドの中で唯一人間に近い感情を持つた高性能AI搭載型カンドロイド……『AI・カンドロイド』の『イメージ』と『シベラー』である。

「イメージュにシベリーまで……」

「んじゃ、俺は先に第1整備室に行くからな。食べたら直ぐに来てくれよ」

そう告げると、影宮は食堂を出た。

「第1整備室ね……。そんじゃまあ、すぐ食べ終わらせるか！」

そう言って、ものの3分でラ・メーンを平らげた。

## 第1整備室

「…………」

竜馬が食堂に出て1時間が経つ。

現在整備室では、影宮とメルダ・ファウンデーションの研究員数名によるオーバーズの改修作業が終盤に差し掛かっていた。

作業の理由は、15枚のコアメダルをオーバーズに取り込む為にバススロットの改良、及び拡大をしている。

「…………よし…作業完了」

影宮はそう言つと、オーバーズに取り付けられていた無数のコードが取り外された。作業が終わると、竜馬はオーバーズの空中投影ディスプレイを見て驚いていた。

「凄い……武装展開時間が更に短縮されてる。おお一バースC-LA Wsの同時展開が3個から6個全部出来るよになつてるー」

「よし、早速テストだ。第4アリーナに向かおうか

「はいー！」

すると、整備室のドアが開かれた。

「やつと終わりましたか

「あ、セシリア。待たせて、ゴメンね」

整備室に入ってきたのはセシリアだった。整備室には立入禁止とされていたため、セシリアは待つ事しか出来なかつた。

「今から第4アリーナに行くからセシリアも『PRRRR!』

…あつ、筹からだ

竜馬はプライベート・チャンネルを開いた。

『竜馬か。用事が済んだから今からそちらに行く。何処に行けばよい』

「今から第4アリーナに向かうところだよ。改修作業が終わったか

ら、そこで性能テストを

『分かった。私もすぐに行くからな』

そう告げると、竜馬は第のバッタ・カンドロイドの電源を切った事を確認して、プライベート・チャンネルを閉じた。

「んじゃ、行くか」

影宮はそう言つと、第4アリーナへと向かつた。

#### 第4アリーナ・ステージ

ステージにはオーバーズを開いた竜馬、影宮、ISスース姿の第とセシリ亞がいた。尚、ピットには千冬と真耶、メルダの研究員達がモニターを見てデータを記録していた。

「それじゃあ竜馬、ドライバーにコアメダルをセツトしてくれ

「分かりました。……」

竜馬は集中すると、ベルトの溝が輝きだした。

「オーズモードの基本となるメダルは、タカ、トラ、バッタだぞ」

「…………」

竜馬はベルトに集中すると、正面にある3つの溝に赤のコアメダル・タカメダル・黄のコアメダル・トラメダル・緑のコアメダル・バッタメダルがはめ込まれた。

「バースモードと同じ様に、右手をベルトにスライドすればOKだ」

「…………」

竜馬は右手をベルトにスライドすると、竜馬の周囲に3枚のコアメダルが回った。そして……

【タカ！トラ！バッタ！ タ・ト・バ！ タトバ タ・ト・バ！】

不思議な歌と共に、竜馬は金色の光に包まれた。光が収まると、竜

馬はオーバースとは形状が異なる装甲を纏っていた。

身体の胸部には円形ブレートの装甲と、頭には小さな赤い羽をモチーフにしたヘッドギア《タカヘッド》が装着され、背中の装甲には赤い翼状の固定型スラスター<sup>パッタレック</sup>が一対あつた。更に腕部の黄色い装甲、脚部の緑の装甲<sup>トラーム</sup>が纏っていた。

コレが、オーバース・オーズモード（別名オーズ）の基本形態……

「な、なんだ？さっきの歌は……」

篠は先程の不思議な歌に疑問を持つが、影宮は気にせずに言った。

「ああ歌は気にしないでくれ、篠ちゃん。そんじゃ、早速テスト開始だ。……………ポチッとな」

影宮はポケットから取り出したスイッチを押すと、竜馬の周りに球体のターゲット・ユニットが5体出現した。

「今からユニットを動かすから全て破壊するんだ。ただし、2体は光学迷彩を機能させるからな。……………スタート！」

影宮の合図に全ユニットは動き出し、そのうちの2体は上昇したのちに光学迷彩によって姿を消した。

「……………速いですね」

セシリ亞はユニットを冷静に見ていた。ユニットは不規則な起動で素早く動いていた。

「行くよ、オーズ！」

そう言つと、竜馬はスラスターを起動して飛び立つた。そのスピードはオーバースピードに比べると、段違いの速さだった。

『腕に意識を集中すれば、装甲に取り付けられてる武器が使えるぞ！』

「はーー……………つーー！」

通信回線から聞こえる影宮の言葉通りに龍馬はトラームに意識を集中させた。

するとサークルに描かれたトラが光りだして、そこからISスースに引かれている頭部・四股に伸びているエネルギー流動路<sup>ライアンドライブ</sup>がトラームに注ぎ込まれた。そして両前腕部にある折り畳み式鉤爪状武器<sup>トラクロー</sup>が展開された。

「ハツ！」

龍馬はトラクロームをユニットに切り付けると、ユニットは爆発を起こした。

『次は脚部だ。脚部はどれも特殊だから、使いこなせば試合でも有利になるぞ』

「了解！……」

龍馬はバッタレッグに意識を集中した。すると、サークルに描かれたバッタが光りだし、ラインドライブがバッタレッグに注ぎ込まれた。

「つおつとー！」

すると、バッタレッグの足裏に内蔵されたバニアが起動して、一気にユニットに近づいた。

「あれは瞬時<sup>イグニッシュン</sup>・ブースト<sup>アシスタンス</sup>加速！」

篠はその行動を見て驚いた。すると、影宮は動作の説明を言った。

「いや、正確にはショートバーニア・ブーストと言つんだ。足裏のバーニアから発生した圧縮空気が噴出されて、最大3回は使用出来る。緊急回避の他に、相手を踏み付けた時に使える……」

「成る程ーその瞬間に使えば、相手を遠くに弾き飛ばせるー。」

篠はそう答えると、影宮は篠を見て微笑んだ。

「せいが～いー篠ちゃんには1ポイントあげよ。おっ、言つたそ  
ばから……」

再び竜馬を見ると、篠が言つたようにコニットがバッタレッジに踏み付けられ、遠くに飛ばされたあと爆発した。

『それじゃ次。各ヘッドはハイパーセンサーの性能を格段に上げる  
ぞ。今から隠れているコニットを探して破壊するんだ』

「分かりました。……」

竜馬は集中するとサークルのタ力が光りだし、ラインドライブがヘッドギアとスラスターに注ぎ込まれた。すると田の前に赤い空中投影ディスプレイ《ホークアイ》を出現させた。見るとそこには光学迷彩を起動しているコニットが見えていた。

「あそこかー」

竜馬はトラクロードに集中すると爪が輝きだした。

「ハアアアアツ！」

そして叫びと共に腕を大きく振ると、トラクロードから真空波が発生してコニットを真つ一つにして爆発させた。

「よつしーあと2体……」

竜馬は残りのコニットを確認した。1体は光学迷彩を起動していて、もう1体は今までのコニットより装甲がデカかつた。

『次は必殺技だ。ドライバーに集中して右手をスライドさせるんだ』

「必殺技？ だつたらあの『デカイ奴』…………つー」

竜馬は意識をベルトに集中して、右手をスライドさせた。次の瞬間

……

【SCANNING CHARGE!】

ベルトから発生された音声と共に、竜馬とコニットの間を赤・黄・緑のリングが出現した。

「ハアアアアアアアアー！」

竜馬は赤・黄・緑のリングを潜り抜けると、コニットに強力な蹴りタバキックを繰り出した。

ドッカアアアアアアン！――！

タトバキックを喰らつたユニットは巨大な爆発を起こした。

#### 第4アリーナ・ピット

「凄まじい威力ですね。コレだつたらシールドエネルギーを一気に削り取られますねえ……」

先程のタトバキックを見ていた真耶は驚いているが、千冬は冷静だった。

（確かに威力は良いが、相手の攻撃で途中中断されたりしたら意味がないな……。まあ、相手の動きを止めたら別か……）

「あ、織斑先生！次は基本武器を使用するみたいですよ」

真耶はモニターを見て言つた。すると、竜馬の右手には大剣が握られていた。

#### 第4アリーナ・ステージ

竜馬は大剣をまじまじと見ていると、鞄付近にはセルメダル投入口が備わっていた。

『そいつは《メダジャリバー》と言つて、京水が昨日完成させたオーブの基本武器だ。威力は近接ブレード並だがセルメダルを入れてから右手をスライドさせると威力が急上昇するぞ』

「了解！」

竜馬はホークアイに映つてゐるユニットを追い掛けながら、メダジヤリバーにセルメダルを2枚セットした。そしてメダジャリバーを右手でスライドせると……

【DOUBLE- SCANNING CHARGE-】

メダジャリバーから発生した音声と共に、刀身は青白い光りを発生させた。

「ハアアアアツ！」

竜馬はスラスターを最大にしてコニーチトに近づくと、メダジヤリバーを豪快に切り付けてコニーチトを撃破した。

『よし。これでターゲット全て破壊完了だな。竜馬、いつたん降りてこい』

「分かりました」

やがて、竜馬は影宮達のところに戻った。

「竜馬さん。お疲れ様です」

竜馬が戻つてみるとセシリアと篠が近づいていた。

「やはり凄いな……。違つ性能を持つたオーバーブーストを短時間で自分のモノにしてしまつとは……」

「いや。これも影宮さんや京水さん、EIS開発局の皆さんが改良したからだよ。ありがとうございます、影宮さん」

竜馬は笑顔を見せて、影宮に感謝を述べた。

「いいでことよ。……次は2対2の実戦テストをしてもらひ。第ちゃん、竜馬と組んで貰えるかい？」

「わ、私でいい」「ちゅうとお待あへだせ…… ムツ

セシリニアに話しが遮断されて、篠は頬を小さく膨らませた。

「何故わたくしではダメなのですか！イギリス代表候補生のセシリ  
ア 「あ……篠ちゃんは、1ポイント持っているから選んだんだ  
よ。ただそれだけ」「え？」

セシリニアは思い出した。確かに、篠にはポイントを持つていた。

「で、では……相手には誰を？？」

「それは……コマイシ達さつ。」

【AH-KAN】

そつ言いながら、篠はマージュとシベラーを起動させた。

「2人共、実戦テストを行なから手伝ってくれ

『（><）了解だぜ』

『〔><〕かしこまつました、マスター』

「そんじゅまあ、お前達のゴーリーを出すか……

パチンチー

影富は指を鳴らすと両隣に2体のコニットが出現したが、ターゲット・コニットとは全く違った。

1体は紅い装甲をしていて、頭部は白いラインの入ったカブトのような角が特徴で、両腕にはセシリ亞のスター・ライトMK?並の長大な砲身が右に2本、左に1本装備された射撃型のコニット。もう1体は蒼い装甲をしていて、頭部はクワガタの顎のようなバイザーが特徴で、右腕にはソード、左腕にはハンマーが装備された格闘型のコニットだった。

そして影富はイメージを紅いコニット、シベラーを蒼いコニットの背中にセットした。

「2人にはコイツ達……KBT NF・カイゼルと、KWG NF・ルミナスの2体と戦つてもらひづか!」

「分かりました。篠、がんばろつか!」

「ああ!」

竜馬と篠はカイゼルとルミナスを見て、闘志を沸かせていた。

## 04話【ドロイドとベストヒュンク連携】

### 第4アリーナ・Bピット

現在、竜馬と篝はBピットにて待機していた。尚、セシリシアはルームメイトと約束していたのを思い出して寮に戻っている。

「…まさか、竜馬が学園に来るまでに訓練していた相手が《ハーフ・ドロイド》だつたとはな…」

「まあ、元々メルダは《ドロイド》を発明した会社だからね。訓練相手にはよかつたよ」

そう聞いた篝は、ステージで出会ったカイゼルヒルミナスを思い浮かんだ。

ドロイド……メルダ・ファウンテーション会長、白黒が開発した無人A.I.ロボットの事であり、医療機関・工場産業・軍事企業等に提供されている。

特に人間と生物を掛け合わせた姿をしているハーフ・ドロイドは軍事企業で訓練機として採用されており、最近ではE.Sとの訓練において最適なユニットである。

「しかしステージに仕掛けを施すと言っていたが、まだなのか？」

「んー…。まだ連絡が来てないから『おーい！』……あつ、來た」

するとピットのモニターが起動して、影宮から連絡が入った。

『準備完了だ。そつちばどうだ』

「はい、こっちも準備OKです」

竜馬は簫を見てみると、簫は既に打鉄を装着していた。それを確認した竜馬も、オーバーズを開いた。

「行こうか、簫！」

「ああ！」

2人はピット・ゲートに進み、ステージに出撃した。

#### 第4アリーナ・ステージ

ピットから飛び出した竜馬達の前に紅と蒼のユニット……カイゼルとルミナスを動かしているイメージュとシベラーが浮かんでいた。

『お久しぶりですね、竜馬殿……』

「ああ。今日も特訓、よろしくたのむよ

『御意』

竜馬の言葉にシベラーは口クリと頷いた。

『久々だからって遠慮はしねえぜ！オレは最初っから全開だ！』

一方、イメージュは戦う事で興奮していた。

「筹、作戦の確認だよ。筹にはカイゼルを任せると。あのロングライフルは威力は高いけど……」

「分かっている。懷に飛び込めばライフルは使えないしな……」

筹はカイゼルの両腕に装備された長大な砲身を見た。2mを超す銃火器は、懷に入ればその威力を發揮されない……。故に、竜馬は剣術が得意な筹にカイゼルを当てさせたのだ。

『んつ？何みてんだ侍オンナ！』

「相変わらず好戦的だ……」

イメージュは筹の視線に気付くと、左腕のロングライフルを向けた。

イメージュの様子を見ていると、通信回線から竜馬の声が聞こえた。

『今回のルールだ。“タトバコンボと純正コンボ以外を使って闇つてみる”。あ、ドライバーにコアメダルをはめ込むんだ…』

「（亞種コンボのみか……）了解しました」

竜馬はベルトに集中すると、タカメダル・バッタメダル・そして緑のコアメダル…カマキリメダルをセットして、右手をベルトにスライドした。

「いくぞ！」

【タカ！カマキリ！バッタ！】

音声と共に光りに包まれると、竜馬はオーズの姿になつた。だが、先程とは決定に違つ箇所があつた。タカヘッド、バッタレッグは同じだが、両腕部が緑の装甲カマキリームになつっていた。

「今度は歌が流れないと…」

篝はタトバコンボに発声していた不思議な歌を聞いていたが、今は流れていないので不思議と思つた。

「タトバと純正のコンボ以外は、あの歌は流れないんだ」

「そうなのか…」

「さあ、もうすぐ開始だよ」

2人は話し終えると、イメージュヒゲラーに再び向き合つた。

『では…………始めつー』

影富が宣言するとシベラーは前進し、イマージュは上昇した。

『シベラー・ルミナス……参つまますー。』

『イマージュ・カイゼル……撃ちまくるぜー。』

イマージュは右腕のツインロングライフルを竜馬に撃つたが、竜馬はショートバーーナで加速してシベラーに迫った。

「まぢは……カマキリだ！」

両腕のラインドライブが輝き、竜馬はそれを注ぎ込んだ。すると、両前腕部に装備されているブレード《カマキリソード》を展開して逆手持ちでシベラーに切り掛かった。

『なんのつー。』

シベラーも右腕のソードでカマキリソードを受け流すと、左腕のハンマーで殴り掛けた。

「よつとー。」

だが竜馬は右足でハンマーを蹴り飛ばすと、左足でシベラーを踏み付けた。

『ぐあつー。』

踏み付けた瞬間バーーナを発動させて、シベラーを弾き飛ばした。

『何やつてんだシベラーー。』

イメージュは再び龍馬を狙おうとした。

「やせるかあつー」

『なつーいつのまにつー』

しかし筈がそれを阻止しようと、刀型近接ブレードで切り掛かつた。

「（懷に入った！）これで…………つーー！」

懷に入らうとした瞬間、筈は左から来た衝撃によつて真横に飛ばされた。

『残念だつたな侍オンナ！長大な銃火器が懷に弱いのは、大昔のことだ！』

そつ……イメージュは懷に入られそうになつた瞬間、左腕のロングキヤノンの砲身を横に振つて筈を飛ばしたのだ。

「これでは迂闊に入り込めないか……」

『では、ワタクシがお相手しましょー』

「ツー！」

飛ばされたシベラーは筈に目標を変えると、イグニッショーン・ブーストを起動して一気に距離を詰めた。

「逃がすかー！」

竜馬はバッタメダルとカマキリメダルを、青いコアメダル・ウナギメダル・黄色のコアメダル・チーターメダルに変更して右手をスライドした。

### 【タカ！ウナギ！チーター！】

すると、カマキリアームとバッタレッグが変化した。  
両腕部は青い装甲<sup>ウナギアーム</sup>、脚部は黄色の装甲<sup>チーターレッグ</sup>に変更された。

竜馬は脚部にエネルギーを送り込むと、太腿部分に付けられているマフラーからスチームが吹出し、ものすごいスピードでシベラーに追いついた。

「待てっ！」

『なんという推進力！これがコアメダルの力ですか……』

シベラーが関心するなか、竜馬は両肩に装着された武器《電気ウナギウイップ》を取り出してシベラーに巻き付けた。

『なんとっ！』

「捕まえた！ウオオオツ！」

竜馬は力いっぱいに電気ウナギウイップを振り回すと、シベラーをイメージに向けて投げ飛ばした。

『ちよちよちよ、二つちくんぐはつ！』

2体はぶつかって下降していくが、地表スレスレのところまで姿勢制御をして地面に着地した。

「よし、こまならー。」

簞はシベラー達を追撃しようと地表に降り立った。

「ジカアアアアアン！」

「なつ……つわつー。」

地表に降り立つた瞬間、爆発が起つた。

「簞ー。」

竜馬は簞と同じ場所に降り立つと、イメージュ達に向かって叫んだ。

『掛かりましたね。このステージー達には、エラしか反応しない』『ランドマイイン』を仕掛けでいますよー。』

『オレ達はドロイドだからランドマイインは反応しねえ仕掛けよー。』

イメージュはさつ言つて、両腕による乱射を行つた。

「へつーー簞、一度離れよう。」

「あ、ああ……。」

2人はその場から急上昇して、弾丸の雨を避けた。

「厄介な仕掛けだなあ…」

竜馬はホークアイでステージを見渡すが、ランドマインは探知出来なかつた。

「どうする？地表に降りると、また爆発を喰らうぞ…」

「…………おひーーの組み合せなら…」

竜馬はコアメダルの情報をディスプレイで見てみると、銀のコアメダル…サイメダルとゾウメダルの情報に目を向けた。

『おいシベラー。追い掛けなくていいのか？』

『追い掛けたところで2対1になるのがオチです。ここは、相手が接近したら仕掛けましょつ…』

『分かつたよ。お、噂をすればだ…』

イメージュは見ると、竜馬達が再度接近していた。

『では、ワタクシは篠ノ之殿を……。イメージュは竜馬殿を頼みます』

シベラーは簾に向かつて飛び立った。

「それじゃあ簾、足止めの方を頼むね」

「ああ……しかしそれで爆弾を把握出来るのか?」

「ああ、僕を信じて!」

竜馬はタカメダルとチーターメダルを変更すると、サイメダルとゾウメダルに変更して右手をベルトにスライドした。

【サイ!-ウナギ!-ゾウ!】

竜馬は頭部と脚部を変更した。

頭部は白銀のヘルメットにサイのような巨大な角が一本付いている  
『サイヘッド』に、脚部は黒い装甲に変わっていた。

「ハアアアアツ!-!-

竜馬はサイヘッドとゾウレッグにエネルギーを送り込みながら、そのまま地表に急降下した。

ズドオオオオオン！！

その瞬間、ゾウレッグによつて巨大な地響きがステージに起つた。

『わっ…とっ…とっ…』

ステージに立つていたイメージは大きな揺れによつて体制を崩した。

「……見つけた、ランドマインの位置！」

竜馬はオーブから送られた地形情報を見ると、十数個の光り……ランドマインがあつた。

ゾウレッグによる踏み付け技ズーストompによつて振動波を起こし、サイヘッドの角グラビッドボーンが跳ね返つた振動波をソナーのように感知して、ランドマインの場所を見つけだしたのだ。

「危ないモノは先に潰す！」

竜馬はサイメダルとウナギメダルを、縁のコアメダル…クワガタメダル・赤いコアメダル…クジャクメダルに変えてスライドした。

【クワガタ！クジャク！ゾウ！】

すると、サイヘッドとウナギアームは変化した。

頭部には、クワガタの顎をモチーフにしたアンテナ《クワガタヘッド》と両肩の後ろに垂れ下がった縁の巨大なツノのアンロック・ユニットを各一本ずつ形成しており、両腕の装甲は赤く左腕に手甲型エネルギー解放器タジヤスピナーが装備された《クジャクアーム》に変更された。

「ハアツ！」

竜馬はタジヤスピナーをランドマインが埋まつてある方に向けると、タジヤスピナーはエネルギー弾を発射してランドマインを爆発させた。

『喰らいやがれっ！』

イメージュは銃口を向けて撃つてきたが、竜馬は急上昇しつつ巨大なツノにエネルギーを送り込んだ。するとツノは展開して、ツノの先が上を向いた事によってクワガタの顎のようになつた。

「お返しだつ！」

『アバババババババツ……』

イメージュは電撃をもひこらめきでしまい、一時的に行動が停止してしまつた。

「また動くようだけど……」

竜馬は上を見上げると、筹とシベラーが激しい戦いをしていた。

「でえええい！」

『ハアアアアアツ！』

筈の刀とシベラーのソードが互いにぶつかり合い、火花を散らしていた。

『流石は篠ノ之流……なかなかの腕ですね』

シベラーは一度間合いを取ると、筈は息を整えて再び構えた。

「いや、私はまだまだ修行が足りない。もっと強くなつて……」

すると筈は、ちらつと竜馬の方に目を向けた。その時、若干頬は赤く染めているのをシベラーは見ていた。

『……成る程。しかし、竜馬殿は鈍感ですよ……。それも超のつく程の方です』

「つーそ……それは……」

筈は一瞬驚くが一度目を閉じて直ぐ開くと、その瞳には決意が宿っていた。

「それでも、竜馬の隣に立ちたい！これからも……その先も…」

言い終わると、幕はシベラーに突っ込んで行った。

『フフフ…。応援しますよ、篠ノ之殿！』

同じく、幕を迎える為シベラーも突っ込んで行く……その時だつた。

「はあつー。」

『ピュンッ！

「何つ！消えた！」

幕は確かにシベラーを切り付けた。だがその感触は無く、シベラーは消えていた。

「いつたい何処に……………つー。」

その時、幕は後ろに気配を感じると刀を横に薙ぎ払った。

『ガギンッ！

「…光学迷彩か」

ぶつけた音が響くと、幕の目の前にシベラーが徐々に姿を現した。

『ほう……ルミナスのオールオーバーを見破るとは……』

「オール……オーバー？」

『御意』

シベラーはまた離れると姿を消した。

「ちつ……また消えた」

篝が言い終わると、何処からかシベラーの声が聞こえた。

『このルミナスが持つ機能です。ハイパーセンサーに反応しない完全隠蔽機能……』

篝はハイパーセンサーを最大にするが、シベラーを見つけられなかつた。

『参りますっ！』

「つー」

その言葉を開始に、篝はいくつもの攻撃を加えられた。

『これで……最後ですー。』

オールオーバーを起動しているシベラーは、篝の後ろに回り込み突つ込んできた。

「 わせなーつ 」

『 何…… つおつー まぶしー 』

シベラーは声の方を見ると強烈な閃光が目に入ってしまった、オールオーバーが解除してしまった。

「 今だ…… 篦！」

「 龍馬…… ーいおおおおおー 」

篠は姿を現しているシベラーに刀で切り付けると、シベラーの推進部に当たって徐々に下降していった。

「 ナイス、 篦！」

「 龍馬……。その装甲はなんだ？」

篠は龍馬を見ると、頭部の装甲とユニットが変化していた。頭部には黄色いヘッドホンに水色のサングラスが付いている《ライオンヘッド》に、両肩横に浮かんでいる左右非対称のアンロック・ユニットが形成されていた。ちなみに、右は外側がギザギザな形のリング型ユニット、左は獣の顔型のユニットになっている。

「 ああ…… オールオーバーは確かに強力なステルスだけど、強烈なエネルギーを浴びせると機能を止めるんだ。だから、このコアメダルならいけると思つて…… 」

竜馬は黄色いコアメダル…ライオンメダルを指差した。

「……」それでテストは終了だな。2体は戦闘の続行が「いや、まだよ」……え？」

竜馬は簾の言葉を遮ると、下に田線をやつた。簾は竜馬が見ている方を見ると、シベラーラーがイメージジューに近寄っていた。

『大丈夫ですか、イメージジュー……』

シベラーラーは若干電気を帯びているイメージジューに近づくと、イメージジューはゆっくりと言った。

『……まだ……痺れるけど……何とかな……』

『ワタクシは推進部をやられました……』

『……んじゅ、こっぢょ、アレ、でもすつか?』

『“アレ”ですか……。良いでしょ!』

シベラーラーの言葉にイメージジューはカイゼルの背中から出て、AI・カンドロイドに変形した。

『（・・・・）もつと暴れたかつたけど、仕方ねえ……。オレは一足先に戻るぜ……』

そう言いながら、イメージジューはその場から転送されて戻った。

『……来ましたか』

シベラーが振り向くと、竜馬と篠がすぐ近くに停滞していた。

「シベラー……、次はどうするの？」

竜馬は次に来る事を知っていたが、あえてシベラーに向かつて聞いた。

『今のワタクシは速く飛べません。しかし……』

シベラーは指を弾くと、カイゼルから音声が聞こえた。

【認証信号確認。カイゼル、変形展開を開始】

「来る…」

「なつー竜馬！」

竜馬は篠の前に回ると、篠の腕を掴んで抱き寄せた。そして、そのままゾウメダルを青いコアメダル…タコメダルに変えてスライドした。

【ライオンークジャク！タコー】

すると、ゾウレッグは青い装甲の脚部に変わり、エネルギーを注入した。その時だった……

「飛ばされないで！」

「あ、ああ！」

シベラーはカイゼルと共に光りに包まれると、強烈な暴風が発生して竜馬達を襲つた。

しかし竜馬がタコレックにエネルギーを注ぎ込んだ事で、地表でも空中でもその場所に留まる事が出来る《オクトスパイク》が発動していた。

「……おさまったようだね」

竜馬は暴風がおさまった事を確認すると、篝に話し掛けた。

「……篝？」

竜馬は返事をしない篝を見ると、篝は顔を真っ赤にしていた。

(り、竜馬……せ、積極的過ぎるぜー。まあ、まあ、まだこじ心の準備がががが……)

「……大丈夫？」

「つーあ、ああ。助かったぞ、竜馬」

「これくらい……ね。でも、もうすぐ終盤だ……」

竜馬はシベラーの方に目をやると、シベラー……もとてルミナスはカイゼルの装甲を身に纏い空中に停滞していた。

『ルミナス、カイゼル・アームズとの合体を確認しました。……お待たせ致しましたね、竜馬殿』

「いや、何となくそれをすると思つたよ。それに、僕が使ってないコアメダルも残り3枚だしね……」

そう言つと、竜馬はベルトのコアメダルを全て変更した。ライオンメダルを青いコアメダル・シャチメダルに、クジヤクメダルを白銀のコアメダル・ゴリラメダルに、タコメダルを赤いコアメダル・コンドルメダルに変更してスライドした。

【シャチ!ゴリラ!コンドル!】

ベルトから音声が鳴り終わると、全ての装甲が変更された。

頭部は背鱗のような突起と2個のライトが付いているヘッドライト  
『シャチヘッド』と背中に2本のボンベとホースが形成していく。  
更に両腕は巨大なガントレット状の武器<sup>ゴリバーン</sup>が装着された銀色の装甲に、  
脚部の装甲には爪先と踵に金色の爪と『ラブタードエッジ』が備わ  
つている『コンドルレッグ』に変更されていた。

『おーい竜馬!』

『影宮さん?』

すると、プライベート・チャンネルから影宮が話し掛けってきた。

『今、使つてゐるコアメダルが最後だな。わざと京水から送られた武器をオーバーズにインストールしたから、使ってみな……』

言い終わると、竜馬の田の前に送られた武器情報が送られた。だがそれを見て、竜馬は知っていた。

「《ライドベンダー》！」

そう……可変型自販機ライドベンダーだった。

『自動操縦可能だつてよ。まあ使ってみてくれ

「分かりました」

影宮は通信を切ると、次に篠に通信回線を開いた。

『篠ちゃん。もつすぐ終わるとこで申し訳ないけど……、篠ちゃんはその場で待機してくれ』

「何故ですか？まだ私は戦えます……」

『今から高速戦闘に入るからな。その打鉄じゃあ無理だろつねー』

やつ言られて、篠はしょんぼつとした。

「や、やつですか……」

『……お話を済みましたか？』

一方、シベラーは竜馬達が影宮との通信を終わらせるのを待っていた。

「ああ。待たせたね

竜馬はすぐ横にベンダーを呼び出すと、セルメダルを投入してバイク形態にした。

『では……行きます！』

シベラーはカイゼルの大型ブースターを起動すると、ものすごい速さで飛び立った。

「いっちはん……行くかな！」

竜馬もライドベンダーに乗ると自動操縦にしてシベラーを追い掛けた。

(竜馬……)

竜はその様子を見て、空を見上げていた。

## 第4アリーナ・Aピット

「いい具合だな……」

一方、Aピットにいる影宮はオーバーズのデータを取っていた。

「…………」

しかし、千冬はモニターに映る龍馬を見て考えていた。

（あれほどどの装甲を変えるIS……聞いた事がないな。さらにメダルの組み合わせで戦況を有利に進める技術と戦い方……。龍馬、お前は……）

すると、千冬は2年前を思い出していた。…龍馬と数年ぶりに会つた懐かしさと、龍馬に起こつた暗い過去を……。

「…織斑先生？」

「……！ああ、どうしましたか？山田先生……」

千冬は真耶の言葉に気付くと、真耶は話し続けた。

「大丈夫ですか？何か考え方をしていたみたいですねけど……」

「大丈夫だ。それより、何か動きがあるようだ」

千冬は再びモニターを見ると、シベラーが高速で龍馬に突進していた。だが龍馬は回避すると、後ろに回り込んだ。

「あのスピードを何とかしたこと、竜馬は勝てんな」

千冬はコーラーを飲みながら、モーターの竜馬を見た。

#### 第4アリーナ・ステージ

「ぐつ……やつぱり速いな……」

現在竜馬はシベラーの後ろにいたが、シベラーのスピードに対するのがやつじだった。

「何かないか……」

竜馬は装着しているコアメダルの情報を調べてみると、シベラーのスピードが上がつて竜馬を引き離した。

『1Jの距離なり……』

シベラーは直ぐさま反転し、両腕の銃口を竜馬に向けて撃つてきた。

「つかつー。」

だが竜馬は回避すると、一寸距離を取った。

「ふう……危なかつたなあ…………ん？」

すると、竜馬はディスプレイに映っている情報を見た。

「シャチメダル……。成る程、やつてみる価値はあるか……！」  
情報を読み終えた瞬間、竜馬は反転してシベラーに突っ込んで行った。

『何か仕掛けますか……だつたら、返り討ちにするまでです！』

それを見たシベラーも、竜馬を迎え撃つため突っ込んだ。

『ハアアアアアアツー！』

「……今だ！」

ぶつかる間際、竜馬はシベラーのすぐ横を通り過ぎるその時だった。

直ぐさま竜馬はボンベにエネルギーを送り込むと、ホースから水が噴出してシベラーに浴びせた。

『水？ そのような攻撃でワタクシがやられるとでも……』

「…………フツ」

『……なにを……。ツー』

竜馬は笑みを見せた瞬間、シベラーは異変を感じた。

『何つ！全システムが機能低下！ブースター、オールオーバー、更にライフルが使用不可！…………あの水か！』

シベラーは急な事態に慌てたが、異常の原因をすぐに見つけた。

「凄い効き田だな、この《カムイ》って……」

竜馬はホースを握りながら、シャチメダルに載っていた情報を思い出す。

カムイ……ボンベに入っているナノマシン入りの水で、相手に浴びせるとシステム障害を起こしたり、武器や特殊武装等を使用不可能にする特殊機能である。

「今がチャンス！」

竜馬はライドベンダーから飛び降りると、シベラーの懷に向かつて行つた。

『ツー甘いですよツー！』

シベラーは懷に入れられそつなどこりで、右腕の砲身を横に降つて竜馬にぶつけようとした。

「それは効かないよ！」

だが竜馬はコンドルレッグにエネルギーを送り込むと、左足を蹴り上げて爪先にあるストライカーネイルで砲身を真つ一つに切り落とした。

『へへへ……』

「まだまだあー！」

更に、右足を踵落としの要領でラプタードエッジから真空波を放ち、シベラーの左腕の砲身を根元から切り落とした。

『ぐあつー..』

「これで最後ー！」

竜馬はシベラーを踏み付けて落下一せると、ベルトに集中してからスライドした。

## 【SCANNING CHARGE】

音声の後、竜馬は輝きを放つて両腕をシベラーに向けて前にだすと、装着されていた「リバーゴーンはロケットパンチ」のように射出する《バゴーンプレッシャー》を繰り出した。

『ぐああああつー..』

シベラーはバゴーンプレッシャーに直撃すると、ルミナスの背中からシベラーは出てきた。

「よつと…」

竜馬はシベラーをキヤツチすると、ルミナスは機能を停止して地表に落ちる瞬間転送された。

『「トト」参りました…』

「……ふう。影面さん、終了しました」

『「」咲乃さん。ピットに戻つて来てくれ』

竜馬は指示を受けると、篠のもとに向かつた。

夕方 寮

第4アリーナでの性能テストを終えて、竜馬と篠は部屋に向かつていた。

「ふう……やつと終わつたあー」

竜馬は背伸びをしていると、結果を思い出していた。  
性能テストの結果……。

「コアメダルの機能がある程度使い熟してたな。もつと戦つて、デ

一夕をたくさん取ってくれ！」

……と、影宮が言っていた。

「筈、今日は一緒に戦えて楽しかつたよ」

「そ、そうか。それはなによりだ」

「……筈、顔が赤いけど大丈夫？」

「だ、大丈夫だ！ほら、部屋に入るぞ……」

真っ赤な顔をした筈は、自分達の部屋に入った。すると……

『「――」お帰りなさいませ、竜馬殿、篠ノ之殿』

竜馬の机の上に、シベラーがいた。

「シベラー……どうしてここに？」

『「――」今田から竜馬殿と共にこようと、マスターから任務を与えられました。ですので……』

『「――」今日から、よろしくお願ひします』

シベラーは竜馬達に頭を下げると、竜馬は近づいていった。

「そうだったんだ。いやいや、今日からよろしく

『「――」はい！』

竜馬はシベラーと握手すると、親友の証をした。

「私も、今日からよろしくだな」

『　　』　　「はい、篠ノ之殿もよろしくお願いします

『　　』　　「竜馬殿の事、頑張つて下さいね」

「なつ..」

シベラーはワインクをしてから言つて、筍は顔を赤くした。

「ななな、何を言つんだ！」

バシツ！

『　　』　　「ひでふつ..」

アコーン..

「.....あ」

筍は恥ずかしそのあまり、シベラーピンタをして壁に減り込ませてしまった。

「シ、シベラー！」

そして、竜馬の叫びが寮内に響いた。

## 04話【アロイドヒートベストと種連発】（後書き）

ひとつあげず「アメダル」5枚を一気にだしました。

「アメダルの詳しい性能は、」  
「IS設定」で記載してあります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6059x/>

---

I・O O O・S インフィニット・オーズ・ストラトス

2011年11月4日15時25分発行